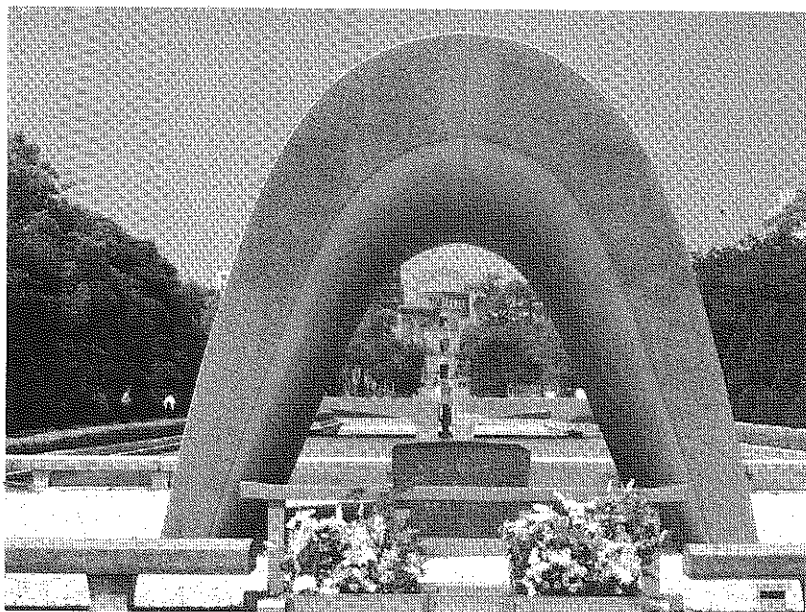


舟入むつみ園

一般養護



原爆死没者慰霊碑

忘れられぬ被爆の日

栗屋輝子（八十四才）



被爆地……南観音町（爆心地より四km）

当時の急性症状……頭の傷

家族の死亡……父・祖母・甥

現在の病状……骨粗鬆症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

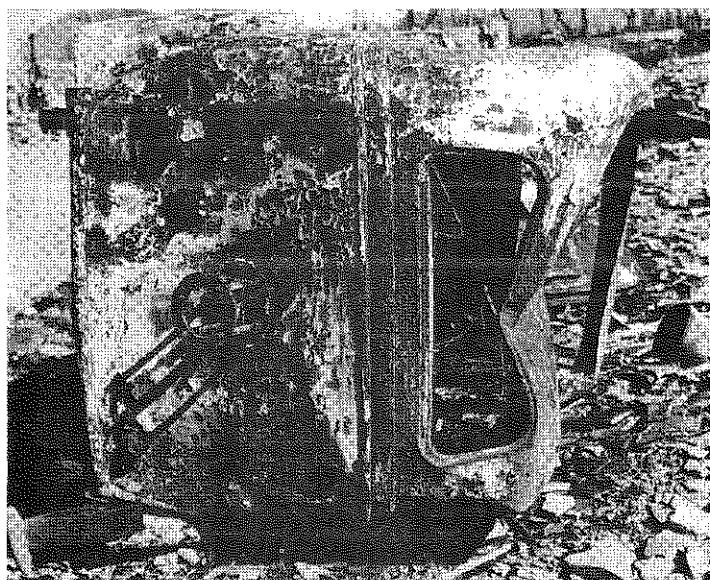
私は、三人姉妹の次女として生まれ、両親と甥と私の四人で西十日市に住んでいました。近くには、祖母も住んでいました。私は、南観音町の三菱機械製作所に勤務していました。

当日の朝は、父も私も早めに家を出て会社に行きました。母は甥と家にいました。私が会社の窓際に立ってお茶の用意をしていると、「ピカッ」と光り、「ドカーン」と大きな音がしました。何が起こったのか分かりませんが、誰かが大きな声を出したので、慌てて机の下に隠れました。その時、頭に軽い怪我をしました。少し時間が経って会社の外の状況を見てびっくりしました。

会社から外に出て、南観音町から一人で歩いて土橋まで帰り、途方にくれていたら、建物疎開

に来ていた学生に会いました。服は焼けて垂れ下がり、男か女か判らない状態でした。ひどい事になったと思いました。自分も二日前には、この場所へ建物疎開に来ていたので何とも言えない気持ちでした。そこへ真っ黒になった女性が子供を連れてやって来ました。古市から来たと言うその女性に「私はもう駄目なので横川までこの子を連れて行って下さい」と頼まれ、私は子供をおんぶして一緒に横川まで行き、迎えに来ていた人に引き渡しました。そこで、祖母の家の近くに住んでいた人を見かけましたが、あまりに変わり果てた姿で声をかけられませんでした。

見渡す限り焼け野原となつていたので、家族は皆死んだと思い、無我夢中で長束まで歩き、そこから汽車に乗り、岩の上の母方の祖母の実家を頼りに行きました。次の日、顔や



自動車の残がい

爆心近くの横転した自動車の残がい
(田子恒男氏撮影／広島平和記念資料館提供)

頭に怪我をしたものの、台所にいて助かった母が、祖母の実家まで来たので再会でき、嬉しかったです。母と私は二、三日厄介になりました。父と祖母と、母と一緒に家にいた甥の行方が分からなくなり、一度に身内を三人亡くして茫然自失の生活でした。

その後、母と私は祇園で生活を始めましたが落ち着かず、義弟の世話で三菱の社宅に入れてもらいました。そこには二年くらいおり、水が出なかったので空き地に井戸を掘った思い出があります。それから、家があった土地に家を建て、野菜など作り、十年余り母と二人で暮らしました。

昭和三十六年に母が亡くなったので安佐北区に家を建て一人暮らしを始めましたが、寒がりのため家を手放し、大野町にマンションを購入して二十年暮らしました。

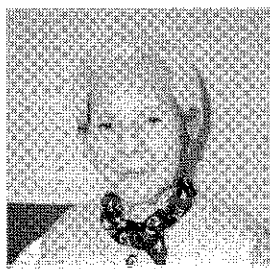
その後、これからの生活や体調面を考えて、ホームに入所しました。

私は、原爆の外傷はたいしたことありませんでしたが、戦争は嫌いです。今も心の痛みは消えていません。



雨と一緒に焼けこげた布や紙くずが

市川ハツエ（九十才）



被爆地……入市（八月七日・横川町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……いとこの子

現在の病状……高血圧・倦怠感

被爆時の状況及びその後の生活

私の父はアメリカのカリフォルニアに住んでおりましたので、母とは写真による見合い結婚でした。私は長女で、私が六才の時、両親は、子供二人を連れてアメリカから加計町かけちやうに帰ってきました。その後、弟が生まれたのですが、母は出産後、血あがりですぐ亡くなりました。

父は再婚しましたが、その後、父・義母とも亡くなりました。

私は加計町で農協に勤めている夫と結婚しました。夫の出征中は実家のある加計町で家を借りて移り住んでおりました。子供は四人おりましたが、一人は疫痢えきりで亡くなり、三人の子供を連れておりました。その中の一人が熱を出しまして、加計の病院へ連れて行くため歩いていたら時、「ド

カン」と大きな音がして白い雲が見えました。病院から帰り、午後、家にいると雨が降ってきて、焼けこげた布や紙くずも一緒に飛んできました。飛行機も沢山飛んできたので、子供達を布団だんすの中に避難させました。

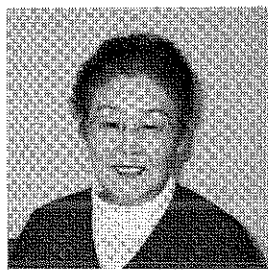
翌日、加計にいた夫の母を迎えに行き、一緒にトラックや馬車を乗り継ぎ、紙屋町迄出て叔母おばを捜すため宇品迄歩きました。叔母も、その家にいたすぐの妹もケガも無く無事でした。四才になる従兄弟いとこの子供が、一人で電車道を歩いているのを父親が見つけて連れ帰りましたが、十日後には亡くなってしまいました。

夫は、終戦から三ヶ月後に朝鮮から復員し、昭和二十二年には次女を出産、夫が四十才の頃に広島に出てきて、宇品で生菓子の製造を始めました。夫はその後、宇品造船の管理人をしました。夫は昭和五十四年五月一日、リュウマチがひどくなり市民病院に入院中に亡くなりました。その後、次男と一緒に基町アパートに入居しましたが、次男が独立したため一人暮らしになりました。習字、編物や絵を描いたりしておりましたが、身体がだるくなって一人暮らしが不安になり、ホームに入れていただきました。ここでは、皆さんに良くしていただき安心した日々を過ごしております。

今は修学旅行の生徒さん達に被爆体験を話して、二度と私のような思いをすることがないように願っております。

二度としてほしくない戦争

岩 並 藤 枝（七十七才）



被 爆 地……松原町（爆心地より二km）

当時の急性症状……下痢・吐き気・めまい

家族の死亡……なし

現在の病状……高脂血症・不眠症・気管支喘息・虚血性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

原爆にあった時は、日本国有鉄道 広島駅の広島車掌区勤務でした。

朝、出勤した後、友達がいる的場^{まどば}へ行こうと思って駅を出た途端^{とたん}に、「ばあー」と何かが光りました。そして、駅の二階に通じる通路だったと思いますが、その辺りまで吹き飛ばされたんです。いろんな物が飛んで来て頭に当たったんですね。「意識不明」みたいになって、目を開けたらグルグル、グルグル眼が廻るんですね。こりゃいけない思いよったら皆がバタバタして、工場から火が出た言っちゃし、そこから出ようと思うても出れんです。頭の上を人が通る音がするけー下からカッカ、カッカ叩いたらバリバリバリはぐって出してくれちゃった。自分の姿を見た

ら、左半分は何も着とらんのよ。紺の制服がボロボロに焼けとった。ほいで、皮膚もところどころ水ぶくれみたいになってね。でも、出して貰^{もら}ったんじゃけ、逃げよう思うて駅のホーム迄逃げ、後向いたら、もう火の海ですよね。こーりゃ逃げないかん思ったら、飛行機の音がするんよね。あの飛行機の音が恐ろしうて恐ろしうて。逃げる途中、足が左半分切れとった。そして、身体いっぱいガラスが刺さっとった。ザラザラするし、痛いし、左側は肩の方から焼けとるし、皮膚は垂^たれとるし、足が痛いね思うたら、足から血が吹き飛びよった。

同じ所に勤めている人と二人で、東練兵場を通って出よったら、途中でお医者さんと看護婦さんに会って、「それじゃ逃げられんけー」と言うて縫うて下さった。逃げた先が矢賀でしたね。

矢賀でむすびを一つもらいました。臨時列車が出て、それに乗せてくれちゃって、近くの小学校へ連れて行ってくれちゃった。小学校ではようけい（沢山の人）寝てました。私等も廊下の方へ転がされて、寝かせてくれちゃったんだが、家へ連絡しよう思うても、連絡も何も出来んです。だから、おおかた三週間位おったですかね。その間、いろんな所が痒^{かゆ}いやら痛いけん、そこにさわると皮膚がツルツと剥^むけるんよね。ほしたら何か気持ち悪い、ウツウツするねー思うたら、蛆^{うし}が湧^わいてましたね。私だけかのー思うて、ゆっくり隣の方をみたら、隣の方も皆、蛆^{うし}がうようよ歩きよった。蛆^{うし}は湧^わくわ、シラミは湧^わくわ、そして毎日二人や三人は死ぬる。あー、ここで死ぬるんじゃわー思うて、三週間位した時でしようかね。巡查さんがずーと見て歩きよっちゃった。「アリヤーあんだ、岩並の子じゃないんかいのー」言うてくれちゃった。「はい、岩並の子

ですが「言うたら「やれんのー。今迄どうしようたんねー。連絡せんかったんかー」言うてじゃけ、「連絡のしようが無いんですが」言うて「ほいじゃー、わしが連絡しといちやるけえー。安心してここにおりんさいよ」言うてくれてじゃけ、おりました。その後、荷車を引っ張って、戸板、今と言う雨戸ですよ、その上にむしろを敷いて、毛布を持って来て下さったんです。

「やれのう、生きとったんのー。皆死んだけー探しに行っても、どれがどれやらわからんわい言うて行かんかったんじゃが悪いことをしたのー。まあ、連れていんじやる（連れて帰る）けえー、いなんかい（帰らんかい）」言うて私の生まれたとこ、豊田郡の福富町に連れて帰って下さったんですよ。

治すのに薬も無いし医者もおらんかった。野っ原に行つて色々な葉草を採つて来たり、よその人に薬を貰うてきて、火傷^{やけど}へ付けてくれたり、えっと（たくさん）おばあちゃんが世話をしてくれました。

下痢もしました。髪も抜けて無くなりましたよ。半年位ですかね。体中からガラスの破片が「あー痒い^{かゆ}な。ここおかしいなー。」思やー手をそこへやったら何か引っかかるでしょう。引っかかるから引っ張ったら、細いガラスは抜けるんですよ。ほいじゃが三角のようになつとったり、奥が広がったら抜けるんですよ。医者で皮膚を切つて、出してもらいました。嫁に行くのに「原爆におうたいのは言うな。原爆におうたらろくな子は生まれんのじゃ」とか「原爆におうた者は嫁にもらうもんじゃないぞ」言うてね。嫁に行くのも苦労しました。

原爆にあった時は、十七才になったばかりでした。被爆した身体を見たら、まあー今思うても・今じゃけえー言えるんよ。あの時のことが話せる。この話を十年前頃話をしてくれ言われてもやめとって言いますよ。

身体が思うようにいかず、どう言うていいか分かりません。左目は光を直接見ただけで眼球が弱つとるので、緑内障と白内障の手術等は出来ない。生きとる間中、ついて回ってます。

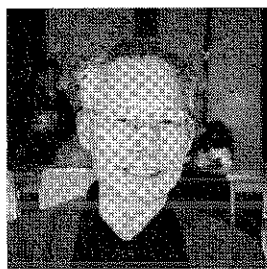
田舎では、原爆におうた言うたら悪い病氣持ちっちゃおらんか、出やせんか思うて、嫁のもらい手もないし、色々な嫌なうわさが流れ、なるべく、人に知られまいとしました。

二度と戦争はやっちゃいけませんよ。何がどうあっても、もうここらでお終りにしてもらわんとね。

今、六十年過ぎた現在でも、はたから見たら健康そうに見えても、私自身は毎日がとても不安な日々です。私は健康体では有りません。

忘れえぬ職場での被爆

大西 千春（七十九才）



被爆地……千田町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……胃潰瘍・腰痛症・冠硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日 午前八時十五分に勤務先千田町一丁目、広島貯金支局にて被爆しました。思い起こせば、当時はいつも空襲警報がよく鳴っておりました。少なくとも一週間に一晚は宿直防空当番が廻り、私も泊まっていました。

八月五日 宿直当番が当たり、その晩は局に泊まり、翌朝、午前八時には次の人と交代の挨拶をすませて、いつもの事ですと、すぐに家に帰っていたのですが、この朝に限り、空の弁当箱を取りに地下一階に降りて、証拠書倉庫に寄って、入口で担当者と談話をしていました。丁度、その時、物凄い強風に押されて息も出来なく、倉庫の奥へ押し込まれました。幸いに私は怪我をし

ませんでした。倉庫の責任者もいないので、私も早めに倉庫を出ました。一階に上がって、びっくりしました。玄関廻りのガラス、事務室の出入口の扉など飛ばされていたり、窓のガラスも全部、粉々にめけて（壊れて）散らかっていました。

玄関ロビーに女性が一人倒れていました。後日、会った時に聞きましたら足の骨が折れていたそうでした。

挺身隊として来られた女学生が、担架に乗せられているのに出会い、怪我の状態を見てびっくりしました。肩から折れている左腕を右手で受け、今から通信病院へ行くと言っていました。私は、友達ととにかく外へ出て、先ず驚いたのは、家が全部将棋倒しの様に傾いていた事でした。次に電車の線路上に四才位の男の子が爆風に押し倒されていました。隣の日赤病院は満員で入れない状態でした。

友人と二人で東方向（丹那）に歩きました。手首から肉が垂れ下がった人、片足がなく患部に板を当てている人。やっとの思いでみんな避難所迄行きました。

当時、兵隊がいて罹災証明書をそこでもらいました。配給のおむすびを一個もらい、夜を明かしました。明朝、友達は横川へ、私は家族のいる庚午（こうご）へ向かいました。幸い家族は生きており、観音町の親しい人達も一緒に私の崩れかけた家での生活となりました。しかし、その中で一人亡くなり、死体を観音小学校の運動場に運んだ事もありました。そこには、半分は裸同然の死体置き場、半分は穴が掘ってあって、焼き場になっていました。その有様は地獄のようでした。

「しばらくは広島は草木も生えない」と聞いていたので、怖くて外出する事が出来ませんでした。一週間後、局へ呼ばれて出勤しました。局員を捜しに班長と一緒にあちこちを捜し歩きました。

局を辞めてから建設、運送等、色々な仕事をしました。定年後もむつみ園に入る三ヶ月前迄、マンション管理や清掃の仕事をしていました。今まで、大きな病気で入院することもなく、元気でいられるのは有難い事です。ずっと一人暮らしをしてきたのでむつみ園に入園でき感謝しています。

戦争もあの悲惨な原爆も、あってはならない事です。



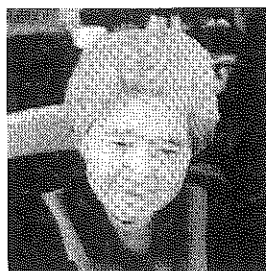
角停電局専売

罹災証明を書く警官。警官自身も窓ガラスでヒタイを傷つけ、頭に三角布を巻いていた。爆心から約2.7キロメートル。

(松重美人氏撮影／中国新聞社所蔵)

若き日の苦しみ

岡 本 美智枝（八十六才）



被 爆 地……千田町（爆心地より一・七km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……脳動脈瘤

被爆時の状況及びその後の生活

子供二人（男六才、女四才）と私の父と四人で、千田町二丁目に住んでいました。私は宇品の陸軍被服支廠に勤めていて、会社の託児所に子供を毎日連れて行くのが大変な為、社宅に移り住みました。八月六日、千田町に衣類等を取りに行ったその時、赤い火が「ピカー」と光りました。急いで宇品の方に逃げました。その後、千田町に帰ってみると家は焼けていました。

八月七日 伯母の家（材木町（加古町）、現在の平和公園の噴水とアステールの間辺り）へ会いに行こうと宇品から住吉橋まで歩いて行こうにも前に進めず引き返しました。

八月八日 もう一度、伯母の家に行く事にして歩きました。現在のアステールの辺りは、当時、

学徒動員の死体を山にして、あめつき 曙部隊の人が焼いていました。伯母は疎開そかいしていて会えませんでした。だが、伯父おじさんには会えました。

その伯父は八月十二日に亡くなりました。

宇品の陸軍被服支廠の倒れた材木を集め、材木町に親戚しんせきの土地があったので、父がバラックの家を建て始め、十月頃出来上がりました。父は昭和二十一年に亡くなりました。お互いにバラックを建てた近所の方で岡本さんと知り合い、再婚しました。岡本さんの家族は原爆で亡くなりました。

自分の子供二人、岡本さんの子供一人、その後、岡本さんの子供が三人出き、皆、元気に育ちました。バラックの家で昭和二十六年まで住んでいましたが、平和公園ができる為、加古町かこまち（旧水主町）に土地を買い、バラックの木材をそのまま使って建て直しました。連れ子をした二人の子供が、家族の犠牲になって家計を助けてくれました。

色々苦しい目にあう中でキリスト教会に出会い、いい話を聞いて力が湧いて、気が楽になりました。みんなそれぞれ独立して夫と二人になり、九年前、主人も亡くなりました。一人暮らしを五年しましたが、だんだん不安と寂しさが強くなった為、知人よりいい話を聞き、むつみ園に申し込みました。四年半待ちましたが、入園する事が出来て今はとても幸せです。

捜しあてた父は少し前に死んだばかり

沖 フジコ（九十六才）



被爆地……入市（八月九日・猫屋町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……両親

現在の病状……高血圧性心疾患・眩暈症

被爆時の状況及びその後の生活

夫が戦死したため、三年生になる娘と二人暮らしで、隣の家には私の両親が住んでいました。

娘は、学童疎開^{そかい}で山県^{やまがたけん}郡にある明覚寺というお寺にいました。私は原爆が落とされる日の前日

に娘の面会に行き、お寺に泊まっていました。

父親は、建物疎開に出ており市役所の側で被爆。母親は、庭の手入れのため花畑に出ており被爆しました。

泊まっていたお寺で、広島が大変だと聞いたので高い所へ行ってみると、おかしな雲が見えて両親のことが心配になりましたが、すぐには帰ることができず、二日後に沢山のおむすびを作っ

て、友達と一緒に山道を歩いて出掛けました。途中、農家に泊めてもらって、夜が明けてから汽車に乗り可部^{かべ}迄行き、そこからトラックに乗せてもらい長束^{ながつか}まで行き、そこから歩いて横川に出ましたが山しか見えず驚きました。

猫屋町あたりには掘っ立て小屋が並んでおり、一軒づつムシロをはぐって両親を捜し歩きました。本川の光道館という学校に生存者の名前が書き出していると聞いたので行ってみました。父の名前を見つけて聞くと、草津の学校へ運ばれたと言いため、陸軍のトラックに乗せてもらい行きました。

父は、戸口の近くに横になっておりまして「少し前に死んだばかりだ」と言われました。半身^{やけど}火傷^{やけど}をしており患部には蛆虫^{うじむし}が湧^わいていました。運動場には死体が山のように積まれており、夜になったら石油をかけて焼くのだと聞かされ



小学生の平和学習

ました。教員をしていた弟の知人がそこに居られましたので、頼んで父の遺体を別に焼いてもらって、お骨を持ち帰りました。

母は、廿日市はつかいちの奥の方に収容されていると聞きまして、妹の主人が迎えに行き、大八車に乗せて長束の妹の家へ連れて帰りましたが、七日後に亡くなりました。近所の人達がワラを持ち寄って、山で遺体を焼きました。

「元安川では水を求めて川に來た人達が、まるで魚を干したようになって死んでいた」とそれを片付けた人から聞きました。

終戦になり、娘と二人で長束の妹の家の一間を借りて住みました。夫の軍人恩給は敗戦により貰えなくなっていました。それまで貯めていたお金で細々と暮らしていましたが、八年後に友人の紹介で再婚しました。再婚相手の家族は、夫の出征中に被爆し、妻子が亡くなっていたのです。

再婚した夫との間に長男が生まれました。夫は、伯父と一緒に天満町の市場で商売をしていました。旅行が好きで、ツアーで九州へ行き、旅先で倒れて入院しました。動かせるようになってから広島市立市民病院へ連れて帰り、看病の生活が始まったのですが、二十五年前に他界しました。それ以来一人暮らしでした。娘は母親の苦勞を觀てますので、私を大切にしてくれました。娘婿も優しい人で、私を度々旅行に連れて行ってくれました。

ある日、ふらつき、座敷で倒れたため、一人暮らしが心配になりました。娘家族から同居を勧められたのですが、丁度、ホーム入所の順番が来ており、見学に行った折、入園者の皆さんから

良い所だと聞きまして入園を決意しました。長男は娘の所で一緒に商売をしており、今は何の心配もありません。九十才迄は手芸を楽しんでおりましたが、ここでは修学旅行の生徒さん達に被爆体験を話してあげてます。そして、生徒さんだけでなく、親御さんからまで丁寧なお手紙を頂き嬉しいです。

今、生かされて・・・

沖 本 絹 子（七十三才）



被 爆 地…………入市（八月七日・横川町）

当時の急性症状…………なし

家族の死亡…………兄

現在の病状…………高血圧・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日早朝、河原町の自宅を出て学徒動員で四キロ離れた祇園町ぎおんの工場に行って

いました。朝点呼で工場の表に並んでいた時に「広島に爆弾が落ちたよ」との事でみんな防空壕に駆け込みました。工場の硝子も粉々になって、少し怪我人も出ました。

怖いくらいの真っ赤な太陽が見え、近所の男の人が「火の玉が落ちる、火の玉が落ちる」と云って駆けて行かれました。その夜は工場の寄宿舎に泊まり、七日早朝徒歩で広島に向かい横川に出ました。

炭で作った人形の様な真っ黒な死体が道の両脇にたくさん、たくさん横たわっていました。今思えば、建物疎開に出ておられた中学生さんだったと思います。

近くに居られた男の人に「河原町の自宅に帰ろうと思います」と問いかけると「広島は全部焼け野原よ。ちゃんとした避難所に行きなさい」と云われ、何時も父から非常の時は五日市に行く様に云われてましたので、福島町の市道に長時間ずっと立って、家族に会えるかと待っていました。夕方、父が全身火傷をした兄と大怪我をした姉と三人で歩いて来たのに会えて、その夜は五日市の親切なお宅に一泊させて貰い、明朝、地御前の神社に行きました。その時は、たくさんの怪我人や火傷の人が板の間に筵を敷いて寝ておられました。

薬もなく、みんな苦しうでした。身体にみんな蛆虫が湧き、夜静かになると蛆虫が傷口を這って、ペチャペチャといやな音がしていました。兄も三日後に息を引き取り、私達（父・姉・私）は父の故郷に行き、田舎に二年ばかり居て、広島に帰りました。次兄もフィリピンで戦死をし、父は意欲をなくしたようでした。

現在、むつみ園でお世話になって、楽しく過ごしています。
学生さん達に原爆の怖さ、戦争の悲しさを聞いて貰う事で、無念の死を遂げた人達の供養になると思ひ務めさせて貰っています。

出 発

折 見 眞 人（七十三才）



被 爆 地……………舟入（爆心地より二km）

当時の急性症状……………下痢

家族の死亡……………祖父・祖母・妹・弟

現在の病状……………甲状腺機能低下症・気管支喘息・下垂体脳腫・

高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

原爆を受けた時は中学二年生、満十三才でした。小学校の間は、学問も含め、軍事訓練で過ご

し、中学校になれば学徒動員で工場に勤めました。

その日の朝は、舟入川口町にある会社の中で、瞬間、大きなマグネシウムを焚いた様な、体がフワッと浮く感じがしました。その後自宅（幸町）へ帰り、母親と弟妹二人に会う事ができました。畑の中で何夜か過ごしていると、父親の居場所を教えてくれる人がいて、早速迎えにきました。

橋の上では、人が重なり合って、一m位の荷車を通す度、人をかき分けて進みました。

その道中、死んだ母親が生きている子供を抱いとした時はどうしようもない気持ちになりました。父の恩人にも生きているうちに会えなかった事も深く残念です。

日赤でようやく父を見つけ、荷車に乗せて家迄帰りましたが、その姿は父とは判別できない状態でした。肋骨は全部折れぺちゃんこ、顔は全部血の塊で固まり、両手もブラブラでしたが、「痛い」という呻き声だけが生きている証でした。その後も体にガラスが何百と入っていて十年経っても出てくる状態でしたが、精神力の強さで回復してゆきました。七年位で字が書けるようになり、守衛の仕事で定年迄働きました。長生きをしてくれました。

母は、腕・肩・足・半身を火傷しました。葉も思うようにならない中、キュウリ等の汁を飲ませたり、貼ってあげたりしました。

被爆前は七人家族でしたが、二人が自宅で即死。祖父母もその晩亡くなり、自分達で葬ってやりました。自分達は、何日寝て、何日食べていないのか記憶にない位手探りの中で時間が過ぎま

した。

しばらく線路の上に軍のテントを張り、そこで生活し、本川小学校に移りました。そこは死体の山で、人・蛆しじそればかりです。死んだ人達を山のように積みあげて焼き、誰の骨かもわからない状態でした。その手伝いもしました。

そこで初めて、自分で食べにゃいけんと思い、キュウリや校庭のサツマイモを掘って食べましたが、食べたたら下痢するの繰り返しでした。郡部の人が勤労奉仕のようにして持って来てくれたにぎり飯を口にした時、涙をこぼしながら食べました。うまかった。生涯忘れることは出来ません。

原爆で、傷ついた頭や骨の见えていた足も、どうして怪我したかわかりませんが、何もつけずに治りました。その時、鈴ヶ峰の生徒が百名以上、僕等が五十六名いて、自分の事より人の世話で一生懸命でした。

僕がいつも考えていることですが、あの時、腹が下る物を炊いて食べたのが、毒を出す事になって良かったのかと思っています。

この近くに、原爆で左目を落とす程の怪我をした同級生がいました。ずっと仲良くしていたその友達が、一昨年亡くなった時、涙が止まりませんでした。

原爆の後、少し経って、命からがら叔父おじが中国から引き揚げて帰ってきました。手に技術を持っている人は引っぱりだこで、自分も手伝って仕事を覚えたんです。弟が自分の仕事ぶりに驚く

程働きました。それ位頑張れたというのは原爆に負けなんだということですね。それを大事に今の自分があると思います。叔父は五十二才で亡くなり、手厚く葬ってやりました。

一人の人間の人生は、竹の根。万が良けりゃ芽が出る。悪けりゃ腐くさっていく。強い心と精神を持って生きていけば、どんな時代でも耐えていけると思う。大きな苦勞、下積みの苦勞があつて初めて人間は一人前になれるんじゃないかね。

母親は、僕がむつみ園に入る少し前に亡くなりました。今でも生きてくれたらと強く感じます。それまで園の存在も知らず、手当も貰っていませんでした。入園出来て自分は幸せ者です。生きていて良かったと思います。

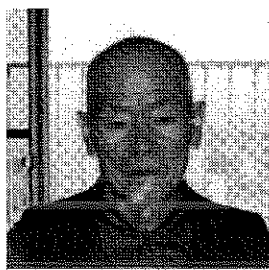
平和学習で来る生徒さん等から「僕達も負けられん」という手紙を貰います。広島の復興が、自分達の生きる原動力となり、その証として道を作ってくれたんだと思います。

職員さんもお互いに認め合い、一緒に生きていってほしい。もう、今の状況で充分です。安心して生きていける社会を作るのが、これからの人間の務めだと思います。



戦争と人生

海 徳 定 一 (七十八才)



被 爆 地……入市(八月六日・横川町)

当時の急性症状……下痢が三年続いた

家族の死亡……なし

現在の病状……動脈・頭痛・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

安佐郡緑井村(安佐南区緑井)で四人兄弟の長男として生まれました。尋常小学校卒業後、昭和十七年四月、東洋工業に就職し、鶴見町の建物撤去作業へ八月五日迄行っており、勤務交代で八月六日より夜勤になりました。当日朝、夜勤を終え、家(緑井)に帰って朝食をすませ、友達の家に行き台所で話をしていました。昔なので台所に電気は無く、うす暗いところでした。

突然、稲光のように「ピカッ」と光ったので、友達と外へ出て、時間にして二、三秒位後に、大きな音が「ドカーン」としました。耳が破れたかと思うほど大きな音がし、キノコ雲が上がリ、何が起こったのか分かりませんでした。広島陸軍西練兵場に弾薬庫があったので、それが爆発したの

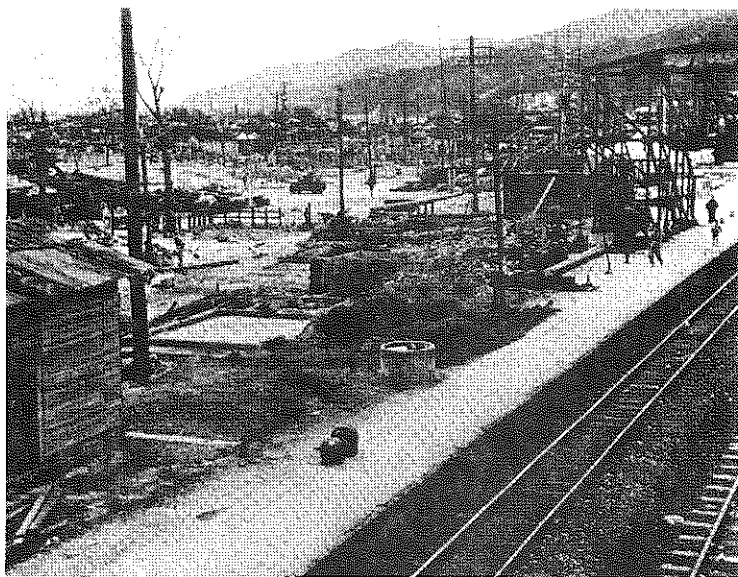
かと思いました。

家の前には可部^{かべ}方向に行く県道があり、火傷^{やけど}をおって両手はぶら下がりが可部の方へ歩いて行く人を見てどうしたのかと思いました。八月六日は夜勤だったので午後二〜三時頃、会社へ行くのに古市迄汽車に乗り、そこから歩いて横川迄行き、駅の時計を見ると八時十五分で止まっていました。構内の枕木が真っ黒に焼けておりました。

三條橋^{みさき}迄来ると憲兵に「お前はどこへ行くのか」と聞かれました。

白島より広島駅の方に歩き、途中、別院付近で川へ降りる段々口があったので、下を見ると死体が水ぶくれになって二〜三人ころがっていました。広島駅迄来ると駅はベシヤンコになり、周囲は焼け野原でした。

この暑いのに兵隊が毛布をかぶって歩いてま



横川駅構内 横川駅構内から打越、己斐方面を望む。 (菊池俊吉氏撮影)

した。会社へ行こうと思いましたが、無理なので広島駅から八丁堀を通って横川に帰る途中、驚きました。相生橋が三箇所、下からコンクリートがむくれて凸状にヒビが入り、電車線路も同じような状態でした。その時迄、原爆のことなど知るよしもなく、八月八日に大本営の発表があり、初めて国民のみんなが広島へ原爆が落ちたことを知りました。

八月九日の新聞には特殊爆弾、大型火薬爆弾と載っていました。あの日の出来事は今でも鮮明に覚えています。

昭和二十年八月十五日、終戦迄、東洋工業に行っていました。戦争に負けたので解雇されました。それから、二三年、腹の調子が悪かったのですが、遊んでいるわけにはいなかったので色々仕事をして働きました。

長男であるのか家建て直そうと思いましたが、実現出来ませんでした。二十三才で結婚し、娘が生まれました。結婚後車の免許を取り、トラックの運転手になり、一生懸命働きました。

基町市営アパートに住み、娘も結婚しました。

動脈瘤を患い、しばらく入院しました。退院してからは十年間一人で暮らしていました。ホームへの入所申込は自分で決めました。運が良く、思っていたより早目に入所出来、今年十年目です。

原爆・戦争は罪です

戒 能 キ ワ（八十七才）



被 爆 地……宇品（爆心地より四km）

当時の急性症状……下痢

家族の死亡……なし

現在の病状……便秘症・胃炎

被爆時の状況及びその後の生活

私は当時二十七才でした。私には子供がなく元気だったので隣り組長と救護班長をしていました。八月四日頃、休暇で広島に帰ってきていた主人と兄、母、私、四人で宇品で暮らし、他の者は松山へ疎開しておりました。

原爆投下の朝、三回の空襲警報の後、解除になり飛行機三機が北上しました。広島は軍都広島といつて主だった機関があり、四国・九州・各地から働きに来ておりました。神戸や九州では、毎日のように空襲がありました。広島には東洋工業に三千メートルに届くような高射砲があり、広島には飛行機はようこないと聞いておりました。

その朝、朝食を食べ終わった頃、「ピカッ」と光ると同時に大きな音が「ドカーン」としたのでガス会社が爆発したのかと思いました。

目を開けて台所から外を見ると、当時は建物が木材だったのでペチャンコになっており広島駅、己斐の方まで見えました。家も傾き窓ガラス枠も壊れ、飛んでいました。家族四人被爆しましたが、怪我もなく無事でした。

暫くすると火傷を負って顔半分が焼けただれた人、ガラスの破片がささった人、衣服は焼け、裸同然で宇品の方へ逃げていく人もいました。私は救護班長だったので、怪我人を担架に乗せ、陸軍の運輸部に運びました。運輸部には軍医さんが十人位残っており、そこから似島の収容所に運ばれました。負傷者の名前が掲示板に書いてありましたが、ほとんどの人が亡くなったと後で聞きました。

まだ歩いて逃げられる人はいいが、逃げることの出来ない人はどうなったのか、翌日、県病院の道路の脇には負傷者が運び込まれていました。助かる人はトラックに乗せ、助かる見込みのない人はそのまま放置してあり、悪臭がしていました。夏だったので負傷した傷が化膿し、ウジ虫が湧き、「痛いよ。痛いよ」と叫ぶ人、「奥さん、水を下さい」と叫んでいる人がおりました。

鉄管より水が噴き出していましたが、火傷の人に水を飲ませると死んでしまうと警防団が来て言うので飲ませませんでした。翌日、親は子供を、子供は親を捜し廻っていました。私は、医師でもなく看護婦でもないのです、治療をすることも出来ず、傷がひどい人は、「助けて」「殺して」と

叫び、苦しみながら皆、死んでいきました。私は何もしてあげられませんでした。

夜になると町全体が燃えて、真っ赤になり火の海で、橋を火が渡るように燃えていましたが、火を消す力のある人はいなく広島町の町が燃えるのを呆然と見ていました。傾いた家を主人と兄が修理し、なんとか住めるようになりましたが、大雨が降り出しました。親戚、友達が私の家に逃げてきたので一緒に暮らしました。主人は、軍人のため八月六日夜、東京に帰っていきました。

当時、広島の人口は三十八万人位でしたが、建物疎開のため、九州・四国・広島奥の方から中学生、一般の人が勤労奉仕に來ていたので六十万人はいたと思います。当時のことは言葉で表すことは出来ません、悲惨で生き地獄でした。

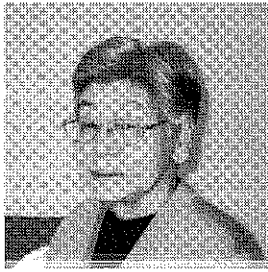
被爆二日後、顔が腫れ、下痢が続きましたが下痢をしたのがよくなったのか良くなりました。主人が復員してくるまで、母と二人で宇品で暮らしていました。原爆投下一週間位にアメリカの飛行機が飛んで来て、上空より十円札位の大きさの紙に「日本の皆さん早く降参しなさい」と書いてあるビラがキラキラ銀色になびいて、光って落ちてきました。拾っていると警防団が来て、見てはいけないと集めて持って帰りました。

私は体調が悪く、歩くのが難しく、歩いては休み座り込む状態でしたので、教会の人に相談し、病院で診察してもらいました。しかし、よくならないし苦しいので、原爆病院で診察を受けたところ「すぐ入院しなさい」と言われ入院し、翌日手術をし、一ヶ月の入院生活でした。原爆病院で認定患者となりました。退院しましたが体調が悪く、入院、退院の繰り返しが当分続きました。

主人はその年の九月に復員し、兄と齒科の材料、機械を扱っている商売と一緒にやっていました。が、体調がおもわしくないので原爆病院で診て貰うと癌に犯されていることがわかりました。手術しましたが、昭和六十三年九月に亡くなりました。私は東霞町より教会に近い昭和町へ移転し、一人で暮らしていましたが、市の保健婦さんが家に来て、一人暮らしはあぶないのでホームへ入所するよう勧めてもらいましたが、二回は断りました。これ以上断ると入所出来なくなると思い入所を決心し、舟入むつみ園に入所しました。

夢中で生きてきた

金子 カズエ（七十九才）



被爆地……千田町（爆心地より一・二km）
 当時の急性症状……下痢・全身倦怠・腫れ物
 家族の死亡……なし
 現在の病状……高血圧症・変形性膝関節症・白内障

被爆時の状況及びその後の生活

あの日は朝から照りつける暑い日でした。私が、千田町の貯金局の三階の机に着こうとした時、突然の強い閃光に驚いていると忽ち、真つ白い煙で目の前が見えなくなり、周りにいた人達も驚きに皆無言。ざわめき始めていたけど私は動く事が出来なくて机の下に座り込みました。ハッと気がついた時は、煙も消え誰もいなく、隅に一人友達が残って居たので一緒に下まで降りました。階段は瓦礫の山、夢中で一階迄降りると地下室から助けを呼ぶ声がするけど入り口は大きな壁が崩れて、私達の力では動かせませんでした。見回しても人影はなく、外に出てみると今まで建っていた家が全部押し潰され、見渡す限り何も遮る物が無い程倒壊し、建っているのは鉄筋の建物だけでした。

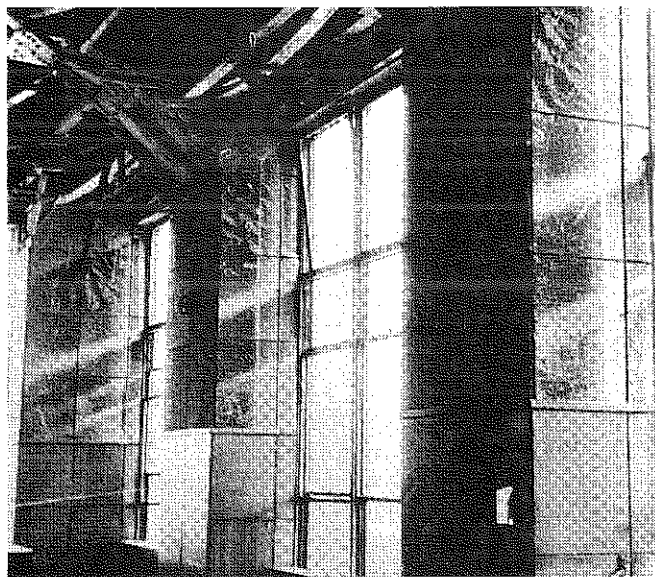
呆然としていると男の人が火傷して「痛い、痛い」と私達の処に来られたので、崩れた家の中から布団を引っ張り出して体に風が当たらない様、掛けてあげました。自分達も早く避難しなければと友達と逃げ、互いに自分の家に帰ろうと途中で別れ、私は横川に向かいました。途中タクシーが真つ黒こげに焼け、運転手も客二人も座ったまま真つ黒こげで動けないでいる人、馬が横倒しになって腸が飛び出ていたり、本当に地獄の中にいる様でした。

ようやく横川に着き、我が家の方を見ると何も遮るものもなく遠い山が見えるだけ、もう駄目だと思って避難場所が地域ごと決まっていたので安という所に向かい、着いた時は夜でした。夜が明けてみると地域の人が、火傷や怪我をした人で一杯でしたが、母と姉・妹とも会う事が出来

ました。家の下敷きになって夢中で逃げてきたそうです。私の顔を見て、死んだと思っていたと喜んでいました。中学生の弟も学徒動員で屋外にいた為、手も足も頭も火傷をしていました。避難している間、一番下の弟が二週間位高熱でうわ言ばかり言っておりましたが、父の従兄弟のいる吉田に引っ越しみんなで看病しました。三ヶ月位して快方に向かい、時々、鼻血が止まらず困りましたが、今は元気で暮らしています。

私も色々、体の不調もありましたが、二人の娘に恵まれ、山口県で暮らしていました。平成四年に主人が亡くなり、一人で暮らしていましたが、最後は広島で死にたいと思い、しばらく老人ホームでお世話になりながらホームへの入所を申し込んでいました。

むつみ園に入所する事が出来、喜んでいま



千田町の貯金局 千田町の広島地方貯金局（爆心から約2キロメートル）の内壁テックスの影。（菊池俊吉氏撮影）

す。平和学習で生徒さんが来られ、思い出してお話するのは辛いけど、一生懸命お話しています。誰かが「川の水が全部涸れても私の涙は涸れない」と言った言葉が忘れられません。

学徒動員

川野 ハルエ（七十三才）



被爆地……己斐（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……高血圧症・糖尿病・めまい・虚血性心疾患

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年二月頃、父は、部落長をしていて、部落の中から一人満州行きを出す事になりました。責任感の強い父は部落の人の反対を押し切り、兄を連れて三月に満州へ行きました。

私の生まれは加計で、父母と兄三人、姉二人、第二人の家族でした。幼い時に長兄は戦死しま

した。当初、父は家族と一緒に満州へ行くつもりでしたが、父が先に行つて、家族は後から行くことにしていました。しかし、あれから父も兄も帰らないままとなりました。何処でなくなったのかもわかりません。今思えば素晴らしい父でした。

私達は加計に残り、土地等は人に貸していました。その年の四月には二期目の学徒動員に出ました。己斐駅に配属になり、三十名の内十名ばかり寄宿舎に入りました。休みの家への帰り道、横川駅では、まだ満州へ送られていない父の荷物、農具がずっと残ったままでした。

八月六日は己斐で研修を受けて点呼が済み、ホームで待機していました。その時、「ピカッ」と光りました。私は誰か写真を撮つておられるのかなあと思いました。そうすると、皆がホームにゾロゾロ出てきて二・三步進んだ途端、上から物が落ちて来ました。辺りが真つ暗になり、耳と鼻を押さえて伏せていると、自然に明るくなりました。屋根は全部落ちて下敷きになったものの、私と友達達はホームで陰になって一寸のかすり傷ぐらいでした。どうにか自分で這い出しましたが、何があったのか全く分かりませんでした。友達と一緒に線路へ降り、皆が避難している山の方へ暗闇の雨の中歩きました。暫くそこへいましたが、午後二時三十分頃、駅へ帰りました。駅では、顔も着衣も全部焼けて無くなった人がゾロゾロ歩いておられました。「水を、水を下さい」と言うておられる人が、数珠つなぎでした。皮膚が垂れて、カーテンか何かまといっておられました。

資料館でこのような光景を見ましたが、実際にはあんなもんじゃなかったです。他の友達が行

方も分ならず、寄宿舍も倒れてありませんでした。帰れない者だけでも五日市の官舎に一晚泊めて貰いました。広島方面を見れば真っ赤に燃えていました。あくる日、自分の家に帰るよう言われ、官舎を後にしました。

当日、川の整理をされたようで、八月七日は人が集中する所を地域の人が整理されていました。逃げ遅れて、顔が半分無かったり、手足が無かったりした人達を三人位、己斐駅で並べておられるのを見ました。

それから、線路を通って横川、長束迄歩きました。汽車に乗って家に帰ったのは、あくる日でした。家にはおばあちゃんと母、第二人がいて、心配していました。吉島に出とった姉が火傷をしたと聞き、迎えに行き連れて帰りました。

十日経った頃、伯母おば（父の姉）と一緒に馬車で、伯母の家（己斐）と寄宿舍の荷物を持って田舎に帰りはじめました。市内の様子を実際に見て、びっくりしました。見渡す限り何も無い焼け野原で煙だけがもうもうと上がっていました。

家に帰ってからが大変でした。一年位しておばあちゃんは亡くなり、父はいないし、姉は工場に働きにでました。私が高で主になって、田んぼ、畑を作り、百姓をしました。一生懸命でした。結婚し、一児をもうけましたが、離別。幸い弟が家の主になってくれたので、子供に何かしてやりたいくて、市内で家政婦をしました。

私の子供が六年生の時、母が寝たきりになり、弟がお嫁さんをもらったのを機に三人で姉の近

くへ出しました。商売をしながら、九年六ヶ月面倒をみました。好きな物は食べさせてあげられ、最後は喜んで亡くなりました。食料品店を十三年、お好み焼き屋を十四年、古市で頑張りました。祇園へ移り、シルバーセンター等に勤めていました。

子供は結婚し、孫も二人、ひ孫もいます。自分は子供を育てるのが精一杯でしたので、娘の為に、孫に今出来る事をしてあげられ、手伝える事に感謝の気持ちです。

原爆ホームを知ったのは、市民病院でした。膝の手術の為に入院した時、隣のベッドの人が、「無理せず、早う申し込んだ方がいいよ」と教えてくれました。退院してすぐに申し込み四年位待ち、あこがれて入園しました。寮母さん達にも本当によくして貰っています。感謝で一杯です。

姑と再三 転居先での苦勞

岸 副 冬 見（八十七才）



被 爆 地……入市（八月八日・弥生町（平塚町））

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の症状……胃術後後遺症

被爆時の状況及びその後の生活

主人はシベリアに抑留よくりゅうされていました。

私達は一ヶ月前の七月二、三日頃、芸備線げいびせんの向原むかいはらに私の実家があったので、姑しやうとめさんと子供二人、私とで疎開そかいしていました。八月六日八時十五分頃だったと思います。朝食後、先に「ピカッ」と光りました。何だろうと思っていると、窓ガラスがビリビリとなり、大きな音が「ドカーン」としました。外へ出てみると、キノコ雲が東の方からムクムクと上がってきました。向原と広島は四十キロ位離れていますが見えませんでした。

原爆が落ちた日、姑が広島へ荷物を取りに行くと言って中三田まで行ったら、汽車に乗っていた人から「広島は火の海で」と言われました。それでも姑は出て行きましたが途中で帰って来ました。

当時は芸備線の切符がなかなか買えませんでした。ようやく八月八日の切符が手に入りました。姑から、私に「広島に行ってみてきてくれ——何か残っていないか」と言うので、八月八日、子供の大きい方（長男）を連れて少しばかりのおにぎりとお茶を持って行きました。矢賀やがまで汽車に乗り、矢賀駅より歩いて平塚本町ひらつかほんまちまで行きました。

歩いて猿候橋えんこうを渡り柳橋を目当てに土手の下をずっと歩きました。土手の下に焼けた遺体、火ぶくれの人がいっぱいでした。途中でやけどした人に会って、「矢賀駅はどこですか」と聞かれました。その方に少しのおにぎりと水を持っていましたので、その中からおにぎり一つと水をあげました。

広島は全部焼け野原でした。電車道の手前を横に入って行きましたが全部焼け、山口町の角にあった銀行だけ残っていました。

わが家の焼け跡をようやく見つけました。裏庭の池で金魚が全部浮いていたので埋めてやりました。

子供は「さんりんしゃ、さんりんしゃ」と言っていました。焼けているのを見て納得しているようでした。

その後、福岡に姑のお兄さんがいるので姑と子供二人、私とで福岡に行くことになりました。「広島を見たい」と言うので連れて行って見せてやりました。

しばらくして、主人がシベリアから帰って来ましたが、栄養失調で一年以上働けませんでした。主人の仕事もなく大変でした。再び、家族全員で向原に戻り、そこへ小さい家を建てました。私は畑仕事をすることがなく、主人も毎日広島へ仕事を見つけに行きましたが、なかなか見つかりませんでした。主人は仕事もなく働けないので、私がコロッケを作り、売ったりと色々と仕事をしました。苦勞の連続でした。

姑は、被爆後二、三年たち、心臓弁膜症^{べんまくしやう}で亡くなりました。妹の主人が「兄さんの仕事を世話するから広島に帰ってくるように」と言いましたので広島へ帰ることにしました。汽車賃がないので母に送ってもらい、鍋・かまを背負って帰りました。

広島旭町にアパートを借り、観音の缶詰工場へ働きに行きましたが、缶詰工場が倒産したので他の会社を世話してもらい、霞町^{かすみちやう}のくじらの缶詰を作る会社で二年位働きました。主人は、平成六年肺炎で亡くなりました。

その後、市が造成した戸坂の「桜が丘団地」に家を建てました。息子は二世帯住宅の家を建て替えて八ヶ月後、五十四才で亡くなりました。

息子が亡くなり淋しく、法要を済ませ、私はここにおるべきでないと思い、ホームに入所を決め、一人で市の福祉課に申し込みました。平成十五年四月にホームに入所しました。

色々と苦労してきました。夜になると考えて眠れません。でも、孫が月一度、墓参りに連れて行ってくれます。

ここの生活にも慣れてきて喜んでおります。

皆にささえられ今一番幸せ

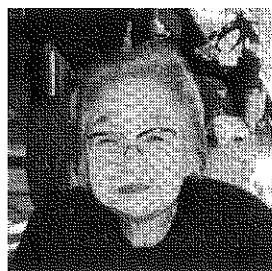
北野 シズエ（八十八才）

被災地……祇園町（爆心地より四・五km）

当時の急性症状……火傷（胸）

家族の死亡……両親・弟・妹・伯父・伯母

現在の病状……高血圧症・不整脈・狭心症・心不全



被爆時の状況及びその後の生活

昭和十一年に結婚し、東京、横浜に住んでおりましたが向こうでの生活も厳しかったです。飛行機でバンバンと近所に弾が落とされたんです。幸い怪我はありませんでした。

昭和十九年に広島に帰ってきて、長束^{ながふ}の大きな家で、子供はいなかったので夫婦だけで暮らしておりました。畑もあり、何でも作れたので食べるものには不自由はありませんでした。

原爆の時は祇園町にいました。外の竹やぶの中で飛行機を見てたら、風船のような物がフワフワと落ちました。音はわからんですが、丁度、火花が上がる時、その中に入った時のような感じでした。「あつい」と必死で逃げようとしたが、そこで倒れて、気を失っていました。私に気が付いた時は、家迄なんとか着いていました。おくどさんが前に倒れてグチャグチャになっていました。二階に上がってみたら、天井は落ち、全部のガラスが落ちて畳にも突き刺さっていました。タンスは全部倒れて、家の中におれなかったです。

その日、主人は市内に出ていて、遅く帰って来ましたが、怪我はしていませんでした。多くの人達が、町からどんどん担架で運ばれて来ました。顔は皆、焼かれて全然わからないくらいでした。名札を付けていて、それでやっと名前がわかりました。とにかく、大勢の人でした。大家さんは怪我はなかったのですが、ウロウロするばかりでした。息子さんが県庁に勤めていて、帰られたら鼻が焦げとったんです。救護班が息子さんを連れていきましたが、やっぱりあの当時の

こと、えー具合にならずに鼻が少しずれて付いています。

そのうちに運ばれてきた人達は次々死んでいつて、どこへ運ばれるか思うたら、土手に連れて行かれて死んだ人を全部井桁いげにして組んでました。油をかけて焼くためです。この世の地獄を見ました。恐ろしかったです。

主人の親戚ばかりですが、家に皆集まってきました。途中で死んだ人もいました。ここまでやっこの思いで来て、「ここにおいてね」と言われ「どうぞ」と言ったらとたんにボタンと死んだ人もいました。唯々、横に寝かせるだけで何もしてやる事が出来ず、オロオロとうろたえるばかりでした。

私は胸が少し開いていた所を火傷やけどしました。皮膚がぶら下がるようになって治りませんでした。下痢、発熱はなかったです。

なすび等を植えてあった畑も、焼けた葉っぱを倒して怪我人の置き場になりました。数え切れないほどの人が運ばれてきました。皆、「水を下さい、水を下さいと頼みます」あっちもこっちも言うんです。兵隊さんが「飲まさないで下さい、言うことを聞かないで下さい」言うてじゃし、「助けて下さい、水を下さい」と両手を合わせて言われるので、どうしようか思いました。しまいには、兵隊さんが「もうどうしようもない。水をやって下さい」と言われました。私とまだ幼かった姪めいが、二人で水を汲くんで飲ませましたが飲んだとたん、皆ガクッと亡くなりました。姪が「おばちゃん怖いよ。水をあげたら皆あー死んでいつてじゃけー。はあー、水をようあげんよー」と言いました。姪は兵隊さんの顔が恐かったし、水を飲めば死んでしまうので、本当によくやった

ですよ。あの様子をよう忘れんのです。

弟は航空兵で、操縦士でした。私は面会によく行っていました。長束に來た、十九年に戦死の公報が來ました。救助に行く途中事故におうたらしく、向こうで立派な合同葬をやってもらったようでした。遺品は、写真と勲章、目録、遺骨だけでした。私には大きなショックでした。その後も長い間、畑仕事を手伝いながら、生活しました。

主人とは縁がなく、別れました。主人の親が、同居をと言って下さいましたが、いつまでもすがっておられず、私は一人で生きていく為に、一年程洋裁学校に通い、ミシンを購入して、自立しました。私が苦しい時に知人からホームの話を知りました。その後、入園させて貰^{もら}い、助けられたのでありがたいばかりです。今は何も言うことはありません。



親指の怪我は心の大きな傷

小山　タツエ（七十六才）



被　爆　地……吉島本町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……左手親指の怪我・血尿・脱毛・湿疹

家族の死亡……なし

現在の病状……高血圧性心臓病（ペースメーカー）・変形性

膝関節症による左右の膝関節痛

被爆時の状況及びその後の生活

私は、二人兄妹の二番目として、三次市^{みよし}で生まれました。生まれて十八日経^たった頃、母は亡くなり、父は、残された乳飲み子を抱えて毎日貰い乳に通いながら、男手一つで幼い子供を連れての生活は大変だったと聞きました。丁度その頃、父の兄夫婦から、子供がいないので一人養子に貰いたいと話があり、父はお互いの家庭の事情も判っていたので、私を養女に出す決心をしたそうです。私は生まれて一年経たないうちに伯父夫婦^{おじかうふ}の養女になりました。伯父夫婦は、吉島本町に住んでいたので、そこで養父母との三人の生活が始まりました。私は、女学校に行くまで養女

であることは知りませんでした。

あの原爆の日、父は八時頃、大手町おおてまちの会社に出かけました。私は学徒動員で、天満町てんまの東洋製缶に勤めていましたが、その日は交代制の勤務で休みでした。母は、黒い色の手作りのワンピースを着て、朝から庭の野菜畑に出ていました。その時、「ピカッ」と光り爆音がしました。硝子やふすまは壊れて飛び散り、畳ははがれ、天井が落ちて、家は傾いていました。私は玄関に近い階段の下に隠れましたが、天井が落ちてきた時、左の親指に怪我をしました。外を見ると、黒い雨が降っていました。

母は、畑でうつ伏せになったまま動かないので傍そばに行くのと、背中に大火傷やけどをしていました。私は、母を連れて日陰に入りましたが、母は火傷が痛くて座ることが出来ませんでした。

父は、この日、帰って来ませんでした。翌朝、私は一人で会社があった大手町まで父を探しにいきしましたが、焼け跡には誰もいませんでした。道端みちばたには、死体がごろごろ山になっており、その中には、妊婦のお腹が破れて赤ちゃんが飛び出したものもありました。死体の山は、悪臭を放っていました。川には水が見えない程死体が浮いて、悪夢としか言えない状況でした。

私が家に帰ると父は帰って来ていました。父は、会社に行く途中、大手町で被爆し、腰を痛めて歩けない状態となり、家まで這はって帰ってきました。父母は、火傷や怪我に庭のどくだみ草を貼はったり、煎せんじてお茶にして飲んだりしていましたが、岡山から医師が廻まわって来られたので手当をして貰もらいました。

家が傾かたむいていたので心配でしたが、近所の大工さんに大きな木でつっぱり棒をして貰もらい、窓も塞ふさいで貰ったので安心して生活する事が出来ました。

家の近くの飛行場には、昼間、トラックが何台も死体を運んで来ていました。毎日、夕方五時になると、兵隊さんが運んだ死体の山に火をつけて焼いていました。丁度ご飯の時、風向きによっては死臭が入ってきて、ご飯が食べられませんでした。一週間たった頃、私は血尿けつにょうや湿疹しっしん、脱毛だつもうになった経緯があったので、病院で検査してもらうことになりました。

終戦後は、広島高等洋裁学校に一年通いました。布が無いため縮図を作り、和紙を布に見立て勉強しました。昭和二十一年、父母の薦めで在学中に結婚し、翌年男の子を出産しました。昭和二十五年に母が、その二年後には主人が亡くなりました。三十年余り水商売の道で働き、やっとな自分の店を二軒持つことが出来ました。その間には、父が亡くなり、人に言えない苦労もありました。

息子の結婚や孫にも恵まれ、家の買い替えをして同居をしました。息子も私の仕事を手伝ってくれていましたが、私が仕事で足の怪我をして半年の入院となったので、店をやめる決心をしました。その後、広島で二、三年一人暮らしをしていましたが、三次みよしの従兄弟いとこの看病をするため、三次に引越しました。怪我をしてからは、膝の痛みがあり一人暮らしに不安を感じるようになったので、知人に相談してホームへの申し込みをしました。浜脇病院に近いホームで、通院も楽にできると思い、平成七年にむつみ園に入所しました。

最近は、毎日の通院で疲れて横になることが多くなりましたが、時々カラオケ広場で歌の練習をして誕生日会や喫茶会で歌うのが楽しみです。

戦争のない平和な世の中が続くよう願っています。



ホームのクラブ活動

あの日の光景を語り伝えたい

島 谷 松 枝（八十三才）



被 爆 地……己斐町（爆心地より二・四km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……坐骨神経痛

被爆時の状況及びその後の生活

あの日（月曜日）は、夏らしい、よく晴れた青空の朝でした。

家族は主人（三十一才）、しやうとめ 姑（六十七才）、私（二十四才）の三人でした。主人は仕事で早く出勤して留守、私は町内の勤労奉仕で己斐旭山神社の山のふもとで防空壕ぼうくうこうを掘りに行っていました。さあ、これから仕事を始めようとした時、「ピカッ」と光り、大きな風が吹き込み、「ドーン」と音がしました。あわてて外に飛び出たその時、びっくり驚きました。どの住宅も同じように、瓦かわらは無く家の形がなくなっていました。私の家はどうかと、急いで帰る途中、見あたる人はみんな、着ているシャツはぼろぼろ、髪は逆立ち、顔は真っ黒、手の皮ははげて、「痛い、痛い」と泣いて

いました。どうしてこうなったのか不思議で、自宅へ急ぎ、見ると私の家もボロボロとなり柱だけになっていました。姑とどこかへ逃げようと思って、源佐門橋の下へと急ぎ、その時、黒い雨が降り、川の水も黒く、気持ち悪いのでこれは山が良いと姑と相談して、旭日山神社の裏へと急ぎ近所の方と三日三晩過ごしました。

眼下の広島市内は火の海で広島駅迄、建物、木々全部焼け野原になり呆然^{ぼうぜん}としました。学校とか川には、死体がいっぱいありました。

やっと火の手も消え、我が家へ帰っても、手のほどこしようなない状態でした。主人の姉の息子が朝出て行ったきり、帰ってこないで学校とか、川とか捜しても見つからず、とうとう家に帰ることはありませんでした。

食料も無く、電燈、水道、ガスもなし、困りました。

現在はどうやら、こうやらとの暮らしです。

十二才〜十三才の中学生の方の建物疎開^{そかい}、作業中の死。なんと七二〇〇人、悲しいことです。

どうしても私達老人が先に死亡すると思えますので、若い方々に伝えて、知って頂きたいと思っております。

原爆のつめあと

下田 幸子（八十二才）



被爆地……三滝（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……脱毛・出血（鼻血）

家族の死亡……両親・妹・弟

現在の病状……左変形性股関節症・骨粗鬆症・高血圧

被爆時の状況及びその後の生活

原爆当時は三滝の家に居ました。家は少し傷みました。

その朝のこと、また飛行機（B 29）からの爆弾が落ちると言うので、近くの竹藪に避難しました。

それから日が何日か経ちました。

私の家でなく、私のおばの家でした。おばの主人は兵隊さんで戦地にいておりました。何年か経って、復員して帰ってきました。食べ物がないので、私は六人の食べ物を工面しに島に行きました。

宇品^{うじな}から船に乗り、向かいの島の切串^{きぐし}、小用の二ヶ所^{こよう}にいきました。そのころは、島には米が少なく、主に大ムギ・小ムギがありました。

歩く道ばたによむき・セリ・ズボナの草が生えていました。それを摘^つんできて、ゆがき、あくを取り、おしたしにして食べました。

いろんなことがありました。

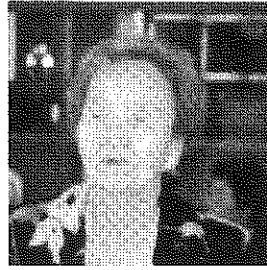
小さいことは、いろいろありましたが、今では忘れました。

今では、むつみ園で入園者の人達と楽しく暮らしています。



ホームの「敬老祝賀会」

火の川



善 家 ミチ子（八十四才）

被 爆 地……東觀音町（爆心地より一・一km）
ひがしかんのまち

当時の急性症状……火傷・脱毛・下痢

家族の死亡……なし

現在の病状……心不全・狭心症・胃潰瘍・高脂血症・慢性気管

支炎

被爆時の状況及びその後の生活

私は結婚して観音町に住んで十日目の朝でした。食事を作ろうとした時、ボウという音と共に赤い光が家の中に入り、その後白い煙も入ってきました。私と主人は、家の下敷きになり、（ボウという音は未だに忘れることが出来ない。）意識が無くなっていましたが、徐々に身体が重いと気が付きました。

傷だらけになりながら、長い時間をかけて瓦礫がれきをかき分けながらはい上がりました。外は暗く、黒い空。変な臭いがしました。（今思えば原爆のにおいだったのかと思う。）主人が、「そこを踏む

なよ、わしがおるんど」と言うため、瓦礫を少しずつ取り除きながら助け出しました。

飛行機（B 29）が再び来たため、無理矢理、主人を引っ張り出した時、主人の足が折れました。私は主人をおんぶして天満川の土手を、みんなが歩いている北の方向に歩き進みました。衣服はみんなわかめの様で、手の皮は下がり、裸足でした。「水をくれ、水を頂戴」と叫ぶ人達が大勢いました（未だにその声は忘れることが出来ない）。朝はきれいだった川の水も赤く染まり、ぶかぶかと死体が浮いていました。

歩き続けていると通りがかった車に乗せてもらい、海岸沿い迄行きました。皆なと一緒に私達も船に乗り、降りた所が三菱（観音）でした。広い場所にゴザを敷いた上に寝かしてもらいました。その中には、死んだ人もいました。生きている人にも耳・目・口等に蛆虫が湧いていました。一、二日は飲まず食わずでした。その後、一日に二食位何か食べた覚えがあります。

「進駐軍が上がってくるぞう、逃げよ、殺されるぞ」との声で、主人をおんぶし、その後、車に乗せられ、江波にある皿山で降ろされました。

三菱造船所で焼けたリヤカーと焼けた布団を貸してもらい主人を引っ張って、以前、可部に疎開していた知人（岡田）の家を訪ねて行き、理由を話しました。広島から沢山の人が家に来ていました。一ヶ月位経った頃、お世話になった岡田さんの家から荷車で主人のお母さんと弟がいる段原に連れて帰ってくれました。生活を助ける為、色々な仕事をして働きました。

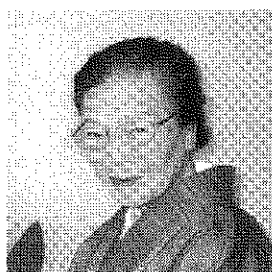
九州から私の父が尋ねて来て、私を九州に連れて帰りました。この時夫と別れることになりま

した。九州には姉妹五人がいました。父が野菜など作って生活していましたが、生活が苦しい為、私は又、広島へ出て土方、その他色々な仕事をしました。その時、今の主人と巡り会い再婚しました。

年を取り心臓が悪く不安な為、主人を一人残してむつみ園へ入園することを決めました。

平和の大切さ 後生に伝えたい

添 田 百合江 (八十三才)



被 爆 地……入市（八月七日・比治山町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……心房細動・狭心症・高脂血症

被爆時の状況及びその後の生活

三次^{みよし}にいて、丁度、田の草を取りに田んぼに入っていました。その時、空襲^{くうしゅう}警報^{けいほう}が鳴りました。

しばらくして「ズシーン」と何とも腹をえぐる様なイヤな音がしたんです。どこかに爆弾が落ちたのかもしれないと思いました。

田舎でしたから空襲におうた事がなかったんです。「あー、あっここに煙が出よるけえ、あれかもしれないね。あの帰還ふくの煙がね、ピーッと上がりよるのを見て、爆弾いうのはあがな事じゃあるまいね」と思いました。

その後、山あいを飛行機（B 29）が七機、右翼をなびかせて飛んでいたもので、田の草取りをやめて見ていました。しばらくすると川向こうの線路に屋根のないガラスの割れたボロボロの汽車が帰ってきました。単線だったので広島へは行かず、こっちへ戻って来る汽車ばかりでした。「あれどうしたんじやろうか、ようあれ動くね」と思いつながら仕事をやめて見ていました。

何がなんだか「どうしたんじやろうね」と話していると、小学校の拡声器かくせいきが「さっきの空襲警報で、新兵器のピカドンいうものが広島に落ちて、広島中が火の海になっとる」と放送されました。たった一発のあれで、広島中が火事になっとる。それであんな汽車が帰って来るんじやねと思いました。

すぐに皆で駅に駆けつけました。そしたら、もうそれは見るも無惨な、まるでこの世の人とは思えぬ姿でした。声は知った人だと分かるのですが、髪はない、服はボロボロ、目玉は飛び出ていて、見る影もありませんでした。広島で爆弾にあい、そのままここに護送されて来たとの事でした。「私、オバケみたいでしょ。人を見て、自分は生きた心地がしなかった」と言っていました。

そして、婦人会で炊き出しをしてオムスビを作って、お寺、神社、小学校に避難している人達に配りました。「痛いよー、熱いよー」と叫んでいる人にうちわであおいであげるのですが、水を飲むとすぐ死ぬると言っていたので、あげられませんでした。

今から思うと、飲んでも飲まなくても死ぬんだったら飲ませてあげればよかったと残念に思います。

ほとんどの人が亡くされました。地獄でした。

主人の事が心配になりました。翌日、切符を手に入れ、広島駅まで行けなかったので、矢賀から線路づたいに宇品^{うじな}まで歩いて行きました。主人は船舶司令部の技術兵の曹長^{そうちやう}で、やっとの思いで宇品に着いたら「このガスが充満しとる所に、なぜこんな幼い子を連れて！すぐ帰れたまえ！」と怒鳴^{どな}られました。主人は後の残務整理や責任でカッカッしていました、秘書の方がかばってくれて、オムスビや缶詰を食^くべさせてくれました。食料の無い時に、あの優しさは今でも忘れられません。私の体を案^{あん}じてか、強い勧め^{すす}めで、又、来た道を同じように帰りました。

その道中、広島^{ひろしま}の町は見られたものではありませんでした。ガラスは飛んでいるわ、見渡す限り焼け野原、何にもなくて、あれが草津の方だと言われても信じられず、ポツンとあったのが、今の原爆ドームじゃろうと思います。

主人の下宿は鉄砲町にありました。爆心地に近かったので、何もかもグジャグジャで跡形^{あとがた}もありませんでした。下宿のおばさんを捜しに行くと、見るも無惨^{むざん}なその姿がそこにあったそうです。

その後も知人を捜して町を歩き廻った様ですが、水槽に顔をつっこんで死んでいたりで、皆むごい姿で亡くなって、見られたものではありませんでした。だから、資料館や原爆の映画などを見たり、原爆の話をするのがとても嫌でした。

職業軍人で終わろうとしていた主人は、終戦の時、日本刀にすがって泣いていました。「この人死ぬんじゃないか」と心配しましたが、十一月頃復員して帰ってきました。

私の友人の娘さんも学徒動員に出て帰って来なかったのですが、親御さんは「原爆の骨」だと言われた誰のかわからない骨を仏さんにあげていました。主人はあの川へ入って「熱い、熱い、水



原爆ドームを望む

真上からの爆風で木は枝をはられ、家屋も押えつけられたような形で倒れた。
(林 重男氏撮影／広島平和記念資料館提供)

が欲しい」と言つて死んでいった人の事を思うと自分達は生きて帰つてこれた事は有難いことだと話していました。主人も齒茎はぐきから出血する等の後遺症が続きましたが、原爆の話をする事をあれほど嫌いやがつていましたが、まだ生きていたら、「後世に残さなければ」と、もしかしたら語り部として率先して活動していたかもしれません。

主人は当初拒んでいた原爆手帳もいただいて、七十五才で亡くなりました。私も、丁度、主人の三回忌の時、元秘書の方から電話があり、保証人を世話して下さいました。私と長女、次女の三人が貰うことができました。当時の原爆症の話はものすごく怖くて、子供の為に立ち上がった事が本当に良かったと思います。そして、語り部で来られた生徒さん達に原爆の話をする時は必ず、「あなた達は幸福よ、生きとうても生きられずに死んでいったよ、勉強したくても出来ずに死んでいったよ」、「死んじゃいけないよ、どんな事があっても、壁にぶつかっても生きててちょうだいね」と励まし、話してあげます。

泣きじゃくる子供さん、キョトンとされる子供さん色々です。入市ですし、火傷やけどもないし、口べたな私が話しをしても伝わるかどうかわかりませんが……戦争の怖さだけは伝えていきたいです。

今、このむつみ園に入園して二年、本当に有難いと思っています。

被爆後の田畑仕事で苦勞

高畑 秀子（八十九才）



被爆地……土手町（比治山町）（爆心地より一・六km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……甥

現在の病状……陳旧性心筋梗塞・変形性脊椎症

被爆時の状況及びその後の生活

私は結婚をして比治山町^{ひじやまちょう}に住んでいました。

両親は段原新町に住んでいました。

八月六日、私は盲腸で入院し退院して五日目でした。被服廠に出勤し仕事にかかろうと思った時ザーと熱風、砂ぼこりが来たため、頑丈な机の下に無意識に入りました。被服廠の屋根は無くなり、五十人位いた職場の仲間も半数以上は亡くなりました。職場の上司が「会いたい人がいたら、会いに行きなさい」と言われ、両親の家に行くも、その家はべっちゃんこになっていて、誰もいませんでした。

段原から被服廠へ帰る途中、電車が真っ黒に焼けていて、川には死体がぶかぶか浮いていました。

八月七日、市役所の前を通ると机が置いてあり、原爆にあった人は、ここに記入しなさいと書いてあり、記入しました。この時はまだ、原爆と言う事は分かりませんでした。

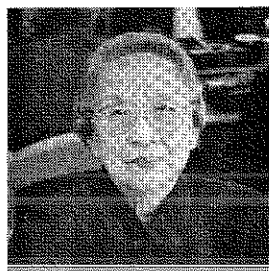
四日目、川に浮かんでいる死体を鳶口（棒の先に鉄のかぎを付けた消防用具）で引き上げ、油をかけて焼いていました。その中には赤ちゃんもあり、目が飛び出ているのを見ました。

広島^{がたぐんとひろし}の街は七、八年は人が住む事が出来ないだろうといううわさがとんだため、主人の田舎、山^{やま}県郡豊平町に住む事にしました。田舎へ来て初めて原爆という言葉を知りました。それから翌年、長女が生まれ、三年後、長男が生まれ、その二年後、次女が生まれました。豊平で二十二年、百姓をしながら生活しました。

次女が広島^{がたぐんとひろし}の学校へ入学する為、次女と一緒に広島で生活しました。平成三年、主人は亡くなり、子供は三人とも独立して、自分一人になり、不安になった為、平成十一年、むつみ園に入園しました。

未だ脳裏より離れる事のない……

田 中 一 子（八十三才）



被 爆 地……比治山本町（爆心地より二km）

当時の急性症状……背中の傷

家族の死亡……なし

現在の病状……心臓肥大

被爆時の状況及びその後の生活

原爆の落とされた昭和二十年八月六日は、忘れる事が出来ない。当時は、主人と二人の生活で、朝の食事の後片付けをしていました。その時、目の前を通ったすごい光がありました。一言も口に出す間もなく背中・腰にドスン、ガラガラ、大きな物が落ちてきて家の下敷きになりました。「動くな、今、出してやる」主人の大きな声で我に返り、助け出してもらい外に出ました。外は薄暗く、まだ自分が自分でない様な気がして、廻りを見て気が遠くなる様な思いました。此の世の地獄の様^{ありさま}な有様を忘れる事は出来ません。橋の上を男とも女とも分からぬ、裸同様、体全体、手も足もピンク、髪は逆立ち、裸足、両手の皮はむけ、頭から流れる血で濡れた髪が顔にべったり

と付いていました。「熱いよー、痛いよー、水をくれ」「お母ちゃん」と言葉にならない細い声で唸りながら一步一步比治山の方へ向かう人。私も主人に支えてもらって比治山の方へ行きました。力尽きてすわる様に倒れて動かなくなる人、赤く、ピンクに皮のむけたモミジの様な小さな手を母の胸の中でぶら下げ、泣きもしない子供、そして動こうともしない母親、三輪車に乗ったまま動かない男の子、その姿が頭の中から消える事は有りません。

私もハダシで足が熱くて、痛くてもなんとか山の中ほど迄来ました。どこの人か、お爺さんが私に「水を一口飲まして下さい、婆さんがおらのんじゃ」と足から血を流しながら私に倒れかかりました。「お爺さん、水がないのよ、ごめんね、ここで休みましょう」と言う「あがいな事いわんで一口でいい」と言って座り込みました。その時、ポツリポツリ、黒い雨が降り出しました。男も女も折り重なる様に大勢の人が動かなく、倒れている上に黒い雨は降り続けました。主人もお爺さんも濡れました。ピンクに焼けただれた手に一ツ二ツの雫に口をあけて、黒い雨を受ける人。此の世の事でしようか。しばらくして、やみましたので、「お爺さん、雨もやみましたよ」と声を掛けてびっくりしました。お爺さんは亡くなっていました。一口の水が欲しかったのでしよう。

私はたまらなく、涙が止まりませんでした。裸で倒れている人達、お爺さんを目のあたりに見ながらこれが現実かと山を下りました。

男も女も親も子も、手を取り合って焼けただれた両手をブラブラし誰となく呼び合い、声にな

らない叫びを出し、水を求めて川の中に入り、そのまま浮いていった人達は、どこ迄流されたのでしょうか。広い海でしょうね。みんな別れ別れです。

六十年経っても忘れる事の出来ない、悲しい、思い出したくない、話したくない事です。

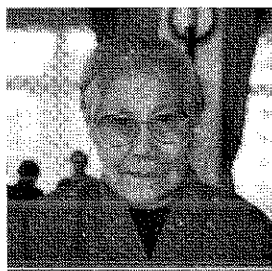
終戦後は、呉で暮らしました。軍人だった主人は、現状についていけませんでした。昭和三十年白血病と肺ガンのため死亡しました。その後は、二人の子供を育てることで精一杯の生活でした。

原爆の恐ろしさ、核の魔絶^{はいぜつ}。二度とあってはならない事です。

世界平和のため願いを込めて。

八月六日の原爆が落ちた瞬間

丹 田 カヅヨ（八十九才）



被 爆 地……草津南町（爆心地より四・一km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……夫の母親・妹二人・兄嫁・姪

現在の病状……左下肢閉塞性動脈硬化症

被爆時の状況及びその後の生活

私は現在八十八才で、原爆が落ちた時二十九才でした。

市内、草津南町で、ドームより四km離れた所に居ました。八月六日の朝五時飛行機（B29）がきて警戒のサイレンがなり、防空壕に避難しました。しばらくして解散になり、家に帰って食事をした後、家内の者は四人とも仕事に出て行きました。

八時十五分、「ピカッ」と光って、すると「ドーン」と大きな音がして家が揺れました。外に出て見ましたら、真っ黒い煙がもくもくと上がっておりました。爆弾が落ちたと言っていました。真っ赤になって焼け始めました。

見ている内に雨が降り出し、黒いつぶの雨でした。爆弾がはじけて雨のように落ちてきました。



原爆死没者慰霊碑参拝

家に入って見ましたら、建具が全部倒れてガラスも散っておりまして。外を見れば人が走ってやって来ました。やけどをした人は、「水を下さい」と言って来ました。水を飲むと死ぬからと知らせがあり、やけどをした人に水もあげられず、暑い日照りの中、苦しかった事と思います。

軍隊のトラックが来て傷ついた人を、連れて行きました。十時、隣に住んでいるお母さんが火傷をして帰りました。その時は、気分はすっかりして話も出来ましたが、十二時に死亡しました。全身火傷をした私の夫の母も連れて帰るからと知らせがあつて待つておりました。夜の九時、毛布に包まれて帰って来ましたが、全身が焼けて、「痛い、痛い」と言つて翌七日、朝五時死にました。

原爆のにおい何ともいえぬくさいのです。

その時、南町は建物疎開で当番になっており、町内の人は皆出かけていました。全部死にました。我が家にも三人（夫の兄嫁・夫の妹二人）の死体がわからず終わりました。

爆弾一つで二十万の人が死んだのです。

平和を願っております。

この世で地獄を見た

津川 タカコ（八十三才）



被爆地……三篠本町（爆心地より二km）

当時の急性症状……右足の火傷

家族の死亡……姉・妹・義姉

現在の病状……心臓病

被爆時の状況及びその後の生活

私は、六人兄弟の五番目として三篠本町で生まれました。二人の兄は兵隊に行っていました。母は私が五歳の時に亡くなり、家には父と義姉と姉妹三人で住んでいました。

あの原爆の日、八時前に家の裏の畑に父がすき田に上の姉と私が出かけ、義姉と妹は近所の人と小網町方面へ奉仕に出かけました。私と姉が草取りをしている時、飛行機（B29）が飛んで来たとと思ったら「ピカッ」と光ったので、姉は西向き、私は東向きにしゃがみました。「ドーン」と大きな音がし、二、三分して立って見ると、隣の家が燃えていました。この付近に爆弾が落ちたと思いました。隣もその隣も燃え二、三軒先の家はべしゃんこで入れない状態になっていました。周

圀の家は焼け、私の家が一軒残っているだけでした。後から気づいたのですが、この時、姉は全身に、私は右足の向こうずねに火傷をしていました。

家に帰ると、父も帰っていました。母屋は無事でしたが、炊事場はつぶれて、障子やガラス窓は爆風で飛んで一枚もなく、畳の上はガラスの山でした。

その時人が来たのを見て、幽霊が来たのかと思ひ言葉が出ませんでした。耳は首の所まで下がつて血が流れ、顔は真っ赤、両手もぶら下がっており、この世で地獄を見たようでした。次から次へと入って来られ「包帯を下さい、葉を下さい」と言われたので、カーテンを切つて包帯にしました。「着る物を下さい、下駄をください」と言われた人は、手からも足からも血が流れ出ていて真っ赤でした。私の家で寝たり、傷ついて一歩も歩けない人が、気が付くと五十人位おられ、父と私は休む間もなく動き廻り、食事の世話をするのがやっとでした。一階も二階も一杯で、私達は軒下で横になりました。米は少し残していましたが四日で無くなり、ジャガイモを食べたり、草を混ぜておじやにして食べました。食べる物が無い時は、水を飲んで我慢しました。

二週間経った頃、兵隊さんが来られて、身寄りのある人を送って行かれました。むすびを貰つて皆喜んで食べました。奉仕に出かけた近所の人が帰ってきて、「一緒にいた義姉と妹が爆風に飛ばされ分からなくなった」と言つて来られました。

父と私は、奉仕に出かけた義姉と妹を捜しに出かけました。爆風に遭い川に流されたか、死体は焼かれたか、行方不明になり一週間位捜したが見つかりませんでした。捜し歩いている時、兵

隊さんが道端^{みちばた}で山になった死体を焚き火の中へ放り投げて焼いていました。うちの家にいた人も八人亡くなりました。私は、父と二人で畑を深く掘り、複雑な気持ちで死体を焼き、手を合わせ祈りました。

私は五人で生活をしていましたが、二人行方不明、火傷をおった上の姉も翌日、体半分が紫色になって、その夜死にしました。一度に三人死んでも、私は忙しくて泣くことも、自分の足の傷の手当ても出来ませんでした。日が経つにつれ寂しさがこみ上げてきました。今でも忘れる事が出来ません。

その後、私は結婚をしました子供に恵まれず、主人とは死別しました。一人暮らしをしながら、自分の趣味である施設のボランティアをしていました。その頃から施設に入ろうと決めており、むつみ園に入園しました。二度と戦争は、起こらないよう祈っています。そのため平和学習では、被爆体験の話をしたり、好きなクラブに入って楽しんでいきます。思いやりをもって仲良く、楽しく暮らしていきたいと思っています。

私の人生で一番辛かった思い出

二井本 胡子（八十九才）



被爆地……救護（八月六日・矢野）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……腰痛症

被爆時の状況及びその後の生活

私達は、大阪に長女（小学校三年生）と長男（小学校一年生）、次男（四才）、私の父、五人で住んでいました。主人が軍隊に入ったため、私の父と子供三人で、主人の里（広島県の矢野）に疎開して来ました。毛たば（かつら）を作る作業場を借りて住みました。

原爆が落ちた日は、「豆腐を作ってもらおうと大豆を持って行く途中、「ドカーン」と大きな音がし、びっくりして大豆をひっくり返しました。その後、矢野小学校に広島から傷ついた人が何百人も運ばれて来ました。婦人会の方が世話をしに行っていました。

私達夫婦の仲人をしてくれた方が、火傷（やけど）をして矢野小学校に来ていたと聞いて、仲人さんの他

十名位の方にも、毎日きゅうりをすった（熱を取るため）のを持って行き、患部に塗ってあげました。傷には蛆虫が湧いていて、それをピンセットで取ると痛いので手で取りました。

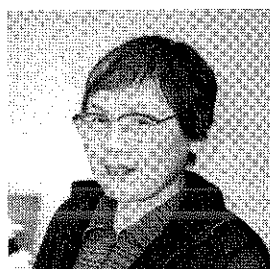
傷ついた人達が「水がほしい、水がほしい」と言っていました。あげたら死んでしまうと聞いていたのであげませんでした。どうせ死ぬのなら、充分飲ませてあげればよかったと今でもその事が悔やんでなりません。毎日、沢山の人が亡くなるのですが、火葬場は山の上で運ぶ事が出来ず、間に合わないでゴミ焼場で焼いていました。

仲人さんは、その時は無事でしたが五、六年後に癌で亡くなりました。

主人が翌年の八月に軍隊から帰ってきました。二年位経って、土地を買い、矢野小学校の南側に家を建てました。昭和二十二年に三男が生まれ、主人は矢野で毛たば（かつら）の製造販売をしていました。子供達も独立し二人で暮らしていましたが、主人が八十五才で亡くなって一人ぐらしになりました。八十才になった時から何事にも危なく、不安で心配でおられなくなり、すぐむつみ園に申し込み、平成十四年七月に入園する事になりました。今はとても幸せです。

今も忘れられない光景

橋 本 ミヨ子（七十三才）



被 爆 地……白島町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……全身にガラスの破片が刺さっていた

家族の死亡……なし

現在の病状……脳梗塞後遺症・頸肩部筋肉痛・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

父親は出征中、母親と弟、妹達（五人）は田舎に引っ越し（疎開^{そかい}）していました。

私は女学生で、勤労奉仕があるため白島の親戚の家で暮らしていました。

当日、学校へ行くため玄関に出たとたん「ピカッ」と光り、「爆風」に飛ばされしばらく気を失っていました。そこはブロックの陰でした。気がついた時は家がつぶれ、火の手があがっていました。見渡すと指先から焼けた皮膚をぶら下げ、うめきながら川の近くに居た人は川へとび込んでいました。

どうしてよいか分からずにいたら、憲兵さんか、警防団の人か分からない人が私をどこかへ連

れて行ってくれました。今思えば、そこは五日市だったと思います。

私は全身にガラスの破片が刺さっており、そこで三週間ほど治療を受けました。その後家へは帰してもらえず、矢口の小学校に収容された負傷兵の看護をさせられました。若い兵隊さんが水を求めていましたが、あげると叱られるため、そつと外に出て布に水を浸らせ与えていました。そこには三百人位の人達が重なるように並べられ、たった三人の女学生がお世話をしていました。夜も休めず、排泄もままならず、そのうち薬も無くなり、メリケン粉を新聞紙に伸ばし患部に貼る状態で、皮膚と身の間にうじが湧き、それを手で取ってあげました。弱ってもう死にそうな人は皆「お母さん」と呼び亡くなっていました。

初めのうちは死んだ人を土に埋めていましたが処理しきれなくなり、運動場に死体を積み上げ、石油をかけて火を付け焼いていました。焼け残ったものは太田川に投げ、流していました。その時の臭いは今も忘れられない。

終戦から二年位経って出征していた父が帰って来た時、母は留守でした。長いこと兵役にしていたため一緒に過ごした記憶が無く、汚れた服で髪伸びた姿の男性を父とは知らず「おじさん」と呼んで叱られました。その後、その父も外地にいたせいかマラリアで亡くなりました。定かではないのですが、五十才位だったと思います。

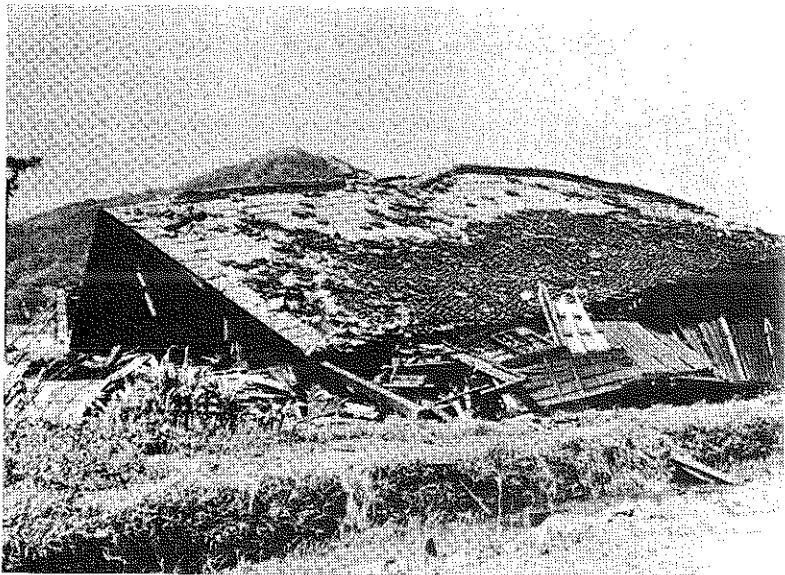
母親は十八年前に胃癌で亡くなりました。

私は戦後、学校へはもう行かずに働きました。日本海事協会に勤めました。保安庁や三菱の一

室を借りた事務所でしたが、私にとってその頃が一番楽しかったです。

二十三才の時、大阪から来た人と結婚し、翌年、長男が生まれました。その後、夫は「広島は自分に合わないので大阪に帰る」と言うため離婚しました。

長男には現在、嫁と子供二人（男一人、女一人）がおり、広島に住んでいます。長男家族とは一緒に暮らすことが出来ず、市内で一人暮らしをしていました。これまでに、つらい日々もありましたが、今はホームに入り、安心の毎日を送っています。



東練兵場付近 爆心から約3キロメートルの東練兵場付近の家屋も倒壊した。
(アメリカ軍撮影／広島平和記念資料館提供)

あの日、あの時……

波 田 ヨシコ（八十九才）



被 爆 地……救護（井ノ口）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……胃炎・心室性期外収縮・右脚ブロック

被爆時の状況及びその後の生活

広島は第五師団司令部が駐屯し、陸軍兵器支廠・糧秣支廠・被服支廠の分所が各地区に置かれていました。全県から招集された陸軍兵は女子高校及び仮兵舎に宿泊していました。学徒動員女子挺身隊員は招集され、小学生は学童疎開（そかい）させられました。女性、老人、病人等が銃後を守っていたのです。

当日、一九四五・八・六 八時十五分、忘れることの出来ないこの数字を境にして、広島の地図は全部塗り替えられてしまいました。空襲警報（くうしゅうけいほう）を聞いて、東の空を見上げた瞬間、「ピカッ・ドーン」大きな音と光が目・耳を通り抜け、建具が全部倒れ、天井は舞い上がり、瓦はがらがらと落

ちました。黒煙が西へ西へと迫って来て辺りが薄暗くなりました。手探りで防空壕へと走りまわった。数時間経ったと思う頃、学校かお寺に行って下さいと云う声が聞こえました。広いお寺の庫裏は「阿鼻叫喚」真つ赤な血に染まった人、片腕のない人、目の飛び出た人、ほとんど裸、うめき声、呼び声にまじり、焼けた皮膚のにおい、血、汗、涙、尿、皆一緒に成ってこの世の地獄と成っていました。医師もいなく、薬もなく、唯呆然と立ちつくしていました。翌朝、交代の時はもう、そこには声もなく、人影は半数になり、ペランダの角には亡骸が山のように積まれていて、涙をさそいました。

救護所となった我が家の患者も髪が無くなり、男女の区別のつかない丸坊主となり、全身に黒いあざが出来、苦しみながら帰らぬ人となりました。苦しい三日後、長崎で爆弾が投下されたことを聞きました。

不安な日を過ごす日、八月十五日、天皇陛下の御言葉がラジオから流れました。

「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで……」涙が流れて頭を上げることが出来ませんでした。日本は負けたのです。私達はこれからどうなるのでしょうか。不安な一日一日を送るうち、敗戦兵士がぼつぼつと帰還し、海外の引揚者、学童疎開の子供達、焼け野原に帰ってきました。

泣き言を云ってはおれませんでした。復興に立ち上がりました。七十年間は草木も生えないだろうと言われた広島土地で今、幸せに暮らしています。

平和学習会で対談したある高校生からの便りに、「原爆の話を聞いて忘れない形にする為に一日

一羽の鶴をおる事にしました。千羽出来上がったら送ります。先が長いけれど元気で待っていて下さい。ちなみに今、二羽出来ました。固い約束をした核兵器の廃絶と世界恒久平和は僕等にまかせてください」と書いてありました。



高校生の平和学習

家族を捜し求めて救護所

濱 崎 登志枝（八十三才）



被 爆 地……中広町（爆心地より一・五km）

当時の急性症状……骨折・白血球上昇

家族の死亡……両親

現在の病状……メニエル病・逆流性食道炎・腰部椎柱管狭さく症

被爆時の状況及びその後の生活

昭和二十年八月六日午前八時十五分の閃光と「ドーン」と物凄い音響は今尚この頭の中にずっしりと残っております。目を閉じ、思い出せば本当に胸がつまり、身震いし、耳はつんとして何も考えられなく成り、唯涙が落ちるのみです。私は幸運にも即死を免れました。あの日は九州への夜行列車に乗り遅れ我が家に帰らず、一才四ヶ月の子供を背負って友人宅へ行く途中でした。産業奨励館より一・五km位の道路で、被爆し、蚊屋会社のコンクリート塀とガレキに埋まり、一時は気絶して何も判らなくなりました。一寸経って耳がかすかに聞こえ、目を開ければ、白・黒の煤煙に包まれ、自分でどうしていたのかわかりませんでした。どこかで「助けて、助けて」との

小さい悲鳴が聞こえていました。私は、どうにか手は動き、あがいている中で足も抜け、幸いに自力で這い出し、背負っていた子供も無事で、やっと我が家へ帰ることができました。途中、足元をみればガレキと死人、どうして良いのか判らず、夢中で死体をまたげ、逃げる方向も無いくらいで、一面に建物は倒れておりました。あちこちから火は燃えて、地面に頭だけ出して「助けてー、助けてー」と叫ぶ人、手・足・片手を出して私の右足にしがみ付く人、四方を見ても誰一人元氣な人は居らず、全身大火傷した人、頭の髪に火が付いて燃えていた人、真裸で着衣はなく全身皮膚は剥がれ、コゲ茶色になった人、ふくれ上がった男女の区別もつかず、目玉だけ「ぱ」と開いてる人、このような状態でした。

川辺にたどりつけば、川面は真っ白に死体が浮いていて、側には山積みの死体が焼かれています。本当に此の惨状は筆舌にはつくされません。

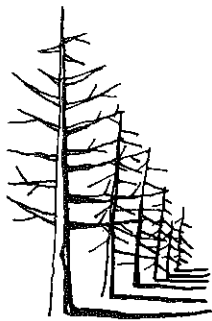
又、後片付けの為、近郊の農村から男女が招集されて、毎日、大八車、トラック、色々な手段で救助にあたられました。全く無傷で奉仕された方々も原爆で放射能の後遺症が出て、一週間、十日、一ヶ月と多くの方々が尊い生命を奪われました。何としてもこんな惨事は二度とあってはならない事です。

瞬時にして親兄弟妹を失い、唯一人ガレキの中に残され、三日たって漸く罹災証明を頂き、一杯のお茶の美味しさは本当に千金でした。やっと人間に蘇った時だったと思います。

食料難は云うにおよばず、日本人は堅い結束でお国の為につくしたのです。

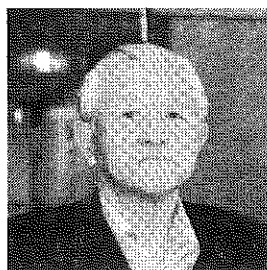
戦前の教育は間違ったともあり、今は自由を与えられ、高度の教育の受けられる時代です。現在でも、戦火におびえてる国があります。お若い皆様のお力を持って、如何なる時にも冷静に耐え、全ての国と徹底的に話し合って、より高度な文化・芸能・スポーツ等を持って全世界の人々が幸せに暮らせる様、心からお祈りします。

原爆六十周年に当たり、あの当時の痛々しい惨状を綴ってみようと決心いたしました。この世の地獄は絶対無くして下さい。



思い出しても恐ろしい惨状

藤原 恒雄（七十六才）



被爆地……入市（八月十九日・松原町）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……気管支喘息・糖尿病

被爆時の状況及びその後の生活

当時、広島東観音町^{かんおんのまち}に親子三人で住んでいました。私には兄妹はいません。父は、日本通運に勤務しておりましたが、八月六日、島根県の浜田市へ二三日出張しておりました。母親は八月六日、朝七時頃、八重へ行くので家を出ました。鈴張まできたところで大きな音が「ドカーン」としたそうです。

私は茨城県霞ヶ浦へ航空兵として十五才で志願し、入隊していました。そこで広島へ原爆が落とされたことを聞き、八月十九日、東観音町へ帰ってみると原爆で家がペシャンコになっていました。両親も疎開^{そかい}し東観音町には誰もいませんでした。父のことが心配で、広島駅へ捜しにいき

ました。

市内は、焼け野原でした。知人より「お父さんは八月六日以後、元気な姿を見たので大丈夫だ」と聞き、自分は歩いて広島駅より両親が疎開していた西原まで行きました。

原爆投下一年後、西原から親子三人で早稲田町へ移転して、間借り生活をしました。回覧で東警察署で補助警官を募集しているのを見たので、応募しに行き、兵器廠で門番として護衛をしていました。そこをやめ、中国新聞社で四年半勤務し、その後、中央新天地商業協同組合で五十九才頃まで働きました。

交通事故に遭い浜脇病院へ九ヶ月間入院しました。父親は六十一才で亡くなりました。母親と舟入本町で暮らしておりましたが、二人とも原爆手帳を持っていたのでホームへの入所を希望。私は平成七年十二月にむつみ園へ入所し、母親は倉掛のぞみ園へ入所し九十二才で亡くなりました。今ではホーム生活にも慣れ、安定した日々を送っております。

被爆忌の一日

二神三利（七十五才）



被爆地……己斐（爆心地より二・三km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……高血圧・腰椎椎間板ヘルニア

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日、私は己斐の山裾、我が家の中で母と弟（現存）と居ました。突然、今まで見たこと
もない物凄い閃光が光りました。同時に家の端まで吹き飛ばされましたが、大怪我はなく軽い負
傷でした。瞬間、家の裏に焼夷弾が落ちたのだと思い、消火にと裏に向かいました。裏には焼夷
弾の落ちた跡もなく煙もありませんでした。私の家も近所の家も半壊し、時計が止まった様
にシーンと静寂で、今何が起きたのか、何も分からず母等と無言で近くの防空壕に逃げていまし
た。

近所の人も皆んな抜け殻のようになって避難して来ました。私は防空壕には入られず、前の竹藪

にいました。

そのうち、腕から足にかけて大火傷やけどの人、全身を負傷している人等々限りない人達が続々と逃げてきました。中には「水を下さい」と言う人もいましたが、私は何がなんだか分らず唯ただ、呆然ぼく然と見ていただけでした。

夕方になって、全身負傷し、顔をボール玉のように焼け腫はらした人が、父を頼って来ました。誰が父か分からなかった様でしたが、その人が小さな声で「トラだ」と言われたので、父が「お前はトラか」とようやく分かったようでした。雨戸の上にその人を乗せて小学校に連れて行きました。学校では、軍医が沢山の負傷者の手当をされていました。その時、トラさんを見て「これは軽い、後回し」と言ったそうですが、トラさんはその夜亡くなりました。その日、にわか雨が止んで、暗くなった頃、負傷（大怪我ではない）した妹が帰って来ました。妹は中学一年（現広島女学院）でした。

その日、クラスの人、大半が建物疎開そかいに行ったそうです。（その人達は二度と帰らなかったと思う。）妹は病弱な何人かと学校に残り、被爆で全壊ぜんかいした校舎の下敷きになったが、大きな火傷も怪我も無く、無事でした。全壊した校舎から這はい出したものの、一瞬にして変わった広島島の姿に方向も分からず、迷い迷いながら、ようやく帰ったとのことでした。帰った妹を見て、母が「男は外に」と言われて、防空壕の前の竹藪の所に出ました。今日の一日は何だったのか、全然何も分からず、その時、夜空が暗かったのか、明るかったのか覚えていません。

まるで無声映画の中、悪夢の中にいるようでした。隣では何処の誰かも知らぬ人が小さい声で「水を下さい」と言う声を聞きながら、朝の来るを待ちました。その後、母方の甥が中心部に住んでおりましたが、捜しに行きました。崩壊した家、死体や豚、馬の死骸でゴロゴロした道を行きましたが、何も分かりませんでした。その後、色々とは話は聞きましたが、真実は分ならず今日に至りました。

夜になつても赤々と燃える広島

松岡 ハルコ（八十七才）



被爆地……高須町（爆心地より三・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……なし

現在の病状……心臓病・骨粗しょう症・大腸憩室

被爆時の状況及びその後生活

夫は出征中で、私はアパートの管理をしながら子供を育てておりました。ごはんの残りでもすびを作り、七輪で焼いていました。子供は外で遊んでいました。「ピカッ」と光り、「ドーン」と大きな音がして外に出てみると子供は倒れていました。私は子供をかばい、子供の上から身を伏せました。子供が鼻血を出していたので、すぐ近くの病院へ連れて行きましたが、そこも建物が壊れており治療はできないと断られました。草津小学校が避難場所になっていたので、そこへ連れて行きましたが、子供は大丈夫でした。しばらくするとあたりが暗くなり黒い雨が降ってきました。外には飛行機が飛んでいました。外に出てみると、ケガをした人達が沢山やってきました。山の方に横穴があり、そこに皆逃げ込んでいました。

午後には父親が来てくれて、家の周りを片付けてくれました。私は子供と貴重品だけを持ち沼田町大塚の実家に身を寄せることにしました。

夕方、己斐小学校の校庭では、死体を沢山積み上げて焼いておりました。また、生きている人達は門の所に寝せられ、ケガ人は田のあぜに並べて寝せられておりました。

沼田町伴村(実家)へ越す己斐峠の頂上迄たどり着いた時は、九時頃だったでしょうか、周囲は真暗でしたが、広島市内は真赤に燃え火の海で、これではアパートも家もだめだと思い、父と二人で涙が止まりませんでした。避難先の実家では逃げてきた人達が「泊めてくれ」と言ってきたので、空いた部屋、納屋までも開放して泊めました。その中に小学生の男の子がおりましたが、夕

飯を食べ、寝て起きたら、朝には亡くなっていました。

二週間後に家に帰ってみると、焼け出された人達が来て、アパートは人であふれていました。家の瓦は、みなはがれて雨漏りはするし、窓ガラスも全部こわれて随分いたんでおりました。幸い実父が大工だったので月三回位泊まりがけで来てぼつぼつ直してくれ、屋根も夫が帰る迄にどうにか人が住める程になりました。

市内三篠に住んでいた伯父夫婦は自宅の修理のため屋根の上で作業中に被爆し、後頭部から背中に大火傷^{やけど}をして実家に帰って来ていました。その後、子供は一年半くらいの間、頭のあちこちにできものができて腫^はれ、膿^{うみ}が出るため、いつもうつ伏^ぶせになって寝ていました。病院へは行かず、家で治療をしましたが跡も残らず、きれいに治りました。膿が原爆の毒を全部出してくれたのだらうと周囲の人に言われました。

夫は昭和二十二年五月に復員しましたが、訳あって離婚しました。子供は夫が連れて行きました。それ以来、私は一人暮らしで、洋服をして暮らししました。旅行が好きで、皆さんに連れられて日本中あちこち行ってきました。別れた夫は六十六才で他界し、今は息子が良くしてくれま^す。息子には嫁と二人の子供がいます。息子の嫁も優しい人で、埼玉に住んでおります。

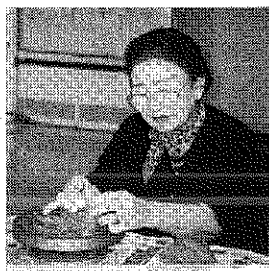
これまで、あまり大きな病気もせずに過ごしてきましたが、今は心臓病と骨粗しょう症、大腸憩室があります。

これからも元気で他人に迷惑をかけないように生きていきたいと思っております。そして、二

度と戦争が起きるようなことが無いように願っています。

亡き家族・友人を想う今日

右 田 繁 子（八十一才）



被 爆 地……若草町（爆心地より二・五km）

当時の急性症状……なし

家族の死亡……姉・妹・甥・祖父母

現在の病状……変形性膝関節症・高血圧症・自立神経失調

症・腰部脊椎管狭窄症

被爆時の状況及びその後の生活

八月六日被爆の朝の事を書きます。

私と隣の美代ちゃんは同じ二十一才でした。

朝八時前、アメリカの飛行機が一機、広島の上空を旋回していました。防空壕ぼうくうごうに逃げる人もい

ましたけど、一機がすぐにいなくなったので朝の支度にかかりました。美代ちゃんが広島弁で「繁ちゃん行こうやあー」と仕事にさそいに来ました。私は未だぐずぐずしてたので「美代ちゃん、先に行きよってやー、すぐ行くけー」と急いでモンペをはき、靴を履いて出ようとしたときでした。びっくりしました。戸を開けたと同時にオレンジ色に空がばあーと明るくなったと思ったら、大きな音がして暗くなりました。

家は傾いて、窓もぐしゃぐしゃになり、近所の人達は、あれはうちの裏に爆弾が落ちた。いや、前の家の前に落ちたと言っていました。

色々それぞれ火のない所からポーと火がついて燃えだし、母も弟も何を持ち出したかわかりません。それでも、早く逃げなくてはと。

そうしていると美代ちゃんが頭の中から足の先まで真っ黒に焼けて帰ってきました。「繁ちゃん」と言ってくれるまで誰やらわからなかったのです。泣き崩れました。すぐ、お母さんの所に連れて行ってあげました。あの時が最後でした。次の朝、亡くなられたそうです。

広島駅の方から裏山に逃げる人も二十人、五十人とどんどん増えてきました。皆、頭から足の先まで真っ黒でした。

手の折れた人、死んだ子供を抱いてる人、「おかあちゃん」と子供は泣き叫び、母親も我が子を大きな声で捜していました。逃げる途中、裏山の近所に大きな軍隊の練兵場がありました。そこでは、年をとった兵隊さん達が何十人もいも作りをしていたそうですが、火傷で皆、亡くなられ

たそうです。一晚裏山の農家にとめてもらい、朝暗い内から、母と一緒においさんとおばあさん、姉、姉の子、妹を捜しにできました。家は一軒も残っていませんでした。人も皆、バタバタ亡くなっていました。電車の中、バスの中、皆黒こげです。

おじいさんとおばあさんは家の下敷きになりましたが、近所の人に助けてもらって生きていました。でも、二週間して、二人とも髪は皆抜け、口から黄色いおりものを吐いて死んでいきました。

当時、小学一年生から六年生は学童疎開をしていました。終戦に帰ってみたら両親は亡くなり、皆、孤児になりました。中学生は皆、学校には行かず建物を壊す手伝いでした。大人が家を壊し、中学生がくずを拾い、大八車で広い所に運んでいました。



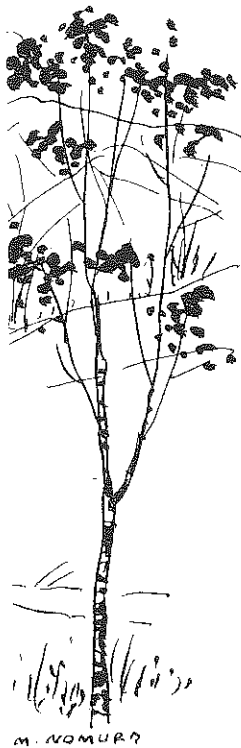
紙屋町交差点付近の復旧作業

曲がりくねったレールの取り替え作業。市民の足を確保するため、懸命の復旧作業が続けられた。
(菊池俊吉氏撮影)

終戦の二年後に結婚し、娘の子を産みました。元気のいい子でした。娘は、二十七才になった時、胸にシコリが出て乳ガンと診察され、手術もしました。五年で再発して四十才で死にました。私達は幸いに原爆養護ホーム舟入むつみ園にお世話になっておりますけど、広島にも他に、もっと重病の方もたくさんおられます。街は色々きれいになり、あの日の面影は全然なくなりまして、私 생각합니다。

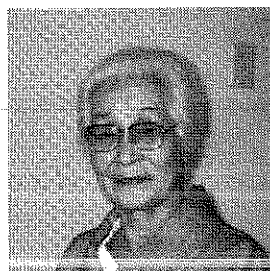
「あの土の中には未だ未だ、泣いている骨が残つとるのでは」と。

生きて少しでも元気でいる間、一人でも多くの若人達にあの苦しみを味合わせないためにも、この話をしっかり聞いて、多くの皆さんにひろめてもらいたいと思います。私もがんばります。



街は火の海

山下 秋子（八十二才）



被爆地……入市（八月六日・京橋町）

当時の急性症状……左腕の湿疹・貧血

家族の死亡……なし

現在の病状……骨髓小脳変性症・脳梗塞後遺症・腰部脊椎管狭

窄症・変形膝関節症・慢性胃炎・高血圧症・パー

キンソン症候群

被爆時の状況及びその後の生活

私は、長崎県の対馬で十人兄弟の末っ子として生まれました。両親と早く死別したため、兄と姉のいる広島（広島）の青崎に来ました。そこで、兄夫婦と一緒に住んでいました。姉三人も近くに住んでいました。

私は、挺身隊（ていしんたい）で日本製鋼所に入り、寮生の食事などのお世話をしていました。

当日の朝は、早出勤務でした。寮生を送り出した後、会社の運転手さんに「水を下さい」と声

をかけられたので水を渡そうとした時、広島の上に蝸蠋カゲロウの炎のような色がパッと広がりました。何だろうと見ていたら、もう一度パッと光が走り、丁度、焚たき火をした時頬ほほがほてるような感じがしました。すぐにドーンと突き上げるような爆音がして、硝子びやうしが飛んできました。裏山の防空壕ぼうくうこうに行こうと外に飛び出たら、大粒の雨が降っており、風が強くて飛ばされそうでした。後ろを振り返ると大きなきのこ雲が立ち込め、宇品の上空には、黒い戦闘機が何機も飛んでいました。私は怖くなり防空壕に逃げました。

家に帰る途中、近くに住む姉の所によると、出かけている義兄が帰ってこないと臨月りんげつのお腹を抱えて心配していたので、私は一人で義兄を捜しに市内へ出かけました。

すれ違う人は皆、火傷やけどや怪我をして服は垂たれ下がり、悲惨ひきんな状況でした。川には死体がいっぱい浮いていました。京橋の手前まで行きましたが怖くなり、急いで姉の待つ家へ引き返してみると、義兄は火傷をして帰ってきていました。姉はその姿を見てびっくりして、お産が始まってしまいました。産婆が間に合わなかったので、無我夢中で義兄の手伝いをしました。無事、男の子が生まれ安心しました。

次の日、日本製鋼所は沢山の怪我人の収容所となっていました。臭くさくて息が出来ない状態でした。看護婦が足りないのです、私も医師について消毒液等を持ってまわりました。医師が患者の包帯をはずすと、蛆うじがわいていて、その蛆を一匹ずつ丁寧ていねいに取り除くの手伝いました。気持ちが悪く、言葉に表せない程の状況でした。

家に帰ってみると、家の前にある青崎小学校にも多くの患者が運び込まれていました。運動場の隅では、木を組んで遺体を焼いていました。毎日毎日、一日中焼かれており、家の窓からその煙が入ってくるので、臭くて臭くてとても嫌でした。数日後、私の左腕に沢山の湿疹しっしんが出ました。三年後ABCで検査をしてもらいました。

終戦後は、関西方面へ行って色々な仕事をしてきましたが、貧血がひどく入院の繰り返しでした。末っ子ですが兄弟には迷惑をかけたくないと思い、また、独り身なので不安もあり、広島に帰り、施設に入所しました。自分も施設で働いた事があるので職員さんの苦労は分かります。

楽しい行事も多く、食事も美味しくいただいています。ホームにも馴染なじんで、毎日を感謝の気持ちで過ごしております。

平和が続くよう強く願っています。



「楽団の演奏慰問」風景